

2010 年度 リサーチペーパー

韓国におけるプロゴルファーの
強化・育成に関する研究

**Research on Strengthening and Youth
Development of Professional Golf Players
in South Korea**

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科
トップスポーツマネジメントコース

5010A305-1

井上透

Toru Inoue

研究指導教員：平田竹男 教授

目次

第1章 序論	6
第1節 背景	6
第1項 韓国人プロゴルファーの活躍	6
第2項 韓国人ジュニアゴルファーの活躍	10
第3項 韓国のゴルフ環境	12
第2節 先行研究	14
第3節 研究目的	14
第2章 研究手法	15
第1節 韓国現地調査とインタビュー調査	15
第2節 日韓プロゴルファーに対するアンケート調査	15
第3章 韓国におけるゴルファー育成の現状	16
第1節 韓国の練習環境	16
第2節 ノ・スンヨルとキム・ヒョンソンのインタビュー	18
第1項 ジュニアゴルファー時代の練習環境と練習量について	18
第2項 兵役に関してのインタビュー	19
第3節 韓国ナショナルチームについてのインタビュー	21
第1項 韓国ナショナルチームの選抜方法	21
第2項 韓国ナショナルチームの育成方法	24
第4節 韓国の指導方法に関するコーチのインタビュー	25
第5節 韓国中高等学校ゴルフ連盟のインタビュー	26
第1項 韓国中高等学校ゴルフ連盟の目的	26
第2項 韓国中高等学校ゴルフ連盟の試合	26
第3項 スコア管理システムについて	27
第4項 韓国中高等学校ゴルフ連盟の運営資金	27
第4章 日韓プロゴルファーのジュニア時代の練習状況	29
第1節 回答者属性	30
第2節 日韓プロゴルファーへのアンケート調査結果	31
第1項 ゴルフに関する意識について	31
第2項 練習内容や環境について	34
第5章 考察	40
第1節 韓国ゴルフ強化の要因	41
第1項 協会のサポート	41
第2項 民間施設のサポート	42
第3項 指導者のサポート	42

第4項	親のサポート	43
第2節	日韓プロゴルファーのジュニア時代の比較	44
第3節	日本におけるジュニア育成環境の現状と課題	45
第1項	日本人ゴルファー強化のための協会の役割	46
第2項	日本人ゴルファー強化のための民間の役割	49
第3項	日本人ゴルファー強化のための指導者の役割	51
第4項	日本人ゴルファー強化のための親の役割	53
第4節	考察のまとめ	53
第6章	結論	54
謝辞	56	
参考文献	58
付録:日韓プロゴルファーアンケート調査用紙	59

図表目次

図 1-1	JGTO と JLPGA における韓国人シード選手数の推移	9
図 1-2	USLPGA における韓国人シード選手数の推移	9
図 1-4	日韓のビジターの平日入場料（グリーンフィー）推移	13
図 4-1	年齢構成	30
図 4-2	回答者カテゴリー	30
図 4-3	ゴルフを始めた時期	31
図 4-4	ゴルフを始めた理由	32
図 4-5	ゴルフ以外の習い事	32
図 4-6	ジュニアゴルファー時代の夢	33
図 4-7	ゴルフは好きだったか	33
図 4-8	1週間あたりの練習日数	34
図 4-9	1日あたりの平均練習時間	35
図 4-10	練習1回あたりの平均球数	36
図 4-11	1ヶ月あたりの平均ラウンド数	37
図 4-12	ジュニア時代の指導者	38
図 4-13	ジュニア時代の練習は自主的だったか	39
図 5-1	日本ナショナルチームの選考方法	47
図 5-2	2009年都道府県別ジュニア人口	50
図 5-3	2005年都道府県別ゴルフ場数	51
表 1-1	1998年以降の女子4大メジャーチャンピオン一覧	7
表 1-2	1998年以降の男子4大メジャーチャンピオン一覧	8
表 1-3	2010年度世界主要6ツアーにおける日韓選手の賞金ランキング最上位比較	8
表 1-4	2010年日韓ナショナルチームの国際大会における団体戦成績	10
表 1-5	2007年度ゴルフ場数上位5国と韓国の人口及びゴルフ人口密度	12
表 3-1	パインレッジゴルフリゾート（ソクチョ）の情報	16
表 3-2	ドリームゴルフレンジ（仁川）の情報	17
表 3-3	キム・ヒョンソンへのインタビュー結果（中学生時代）	18
表 3-4	キム・ヒョンソンへのインタビュー結果（高校生時代）	18
表 3-5	ノ・スンヨルへのインタビュー結果（小学生時代）	19
表 3-6	ノ・スンヨルへのインタビュー結果（中学生時代）	19
表 3-7	韓国ナショナルチーム ポイント加算大会一覧	22
表 3-8	大会の得点配分	23
表 3-9	韓国ナショナルチームと各年代の育成枠の人数	23
表 3-10	韓国中高等学校ゴルフ連盟の情報	26

表 5-1	韓国ゴルフの育成における強みと弱み	40
表 5-2	日本ゴルフの育成における強みと弱み	45
表 5-4	日韓のナショナルチームの比較.....	47
表 5-5	坂田塾の練習スタイル	52
写真 1	韓国ジュニアゴルファーの練習風景	25

第1章 序論

第1節 背景

2010年の日本男子プロゴルフツアーでキム・キョンテが韓国人として初の賞金王に輝いた。また同年に日本女子プロゴルフツアーでもアン・ソンジュが韓国人として初の賞金女王になった。また近年、世界中で韓国人プロゴルファー及びアマチュアゴルファーの活躍が目立っている。しかし、韓国のゴルフ場の数やコストは決してジュニアゴルファーを育成するためには良いとはいえない。

第1項 韓国人プロゴルファーの活躍

近年、世界における韓国人プロゴルファーの活躍は著しい。表 1-1 は 1998 年以降の女子メジャーチャンピオンの一覧である。朴・セリの全米女子プロゴルフ選手権と全米女子オープン優勝以降、6名の韓国人女子メジャーチャンピオンが誕生した。スウェーデンのアニカ・ソレンスタムやオーストラリアのカリー・ウェブは数多くのメジャーで優勝しているが、1998年以降、6人ものメジャーチャンピオンを輩出している国はアメリカと韓国のみである。特に近年では、ジュニア時代に朴・セリの活躍に影響を受けたと思われる世代の台頭が目立つ。なお、全英女子オープンは2001年にメジャートーナメントに昇格した為、それ以前のチャンピオンは記載していない。

表 1-2 の 1998 年以降の男子 4 大メジャーチャンピオンの一覧ではタイガー・ウッズの活躍が際立っているが、2009 年の全米プロゴルフ選手権では Y・E・ヤン選手が韓国人男子プロゴルファーとして初のメジャーチャンピオンになった。

表 1-1 1998年以降の女子4大メジャーチャンピオン一覧

開催年度	クラフト・ナビスコ 選手権	全米女子プロゴルフ 選手権	全米女子 オープン	全英女子オープン
2010年	ヤニー・ツェン	クリスティー・ カー	ポーラ・ クリーマー	ヤニー・ツェン
2009年	ブリタニー・ リンシコム	アンナ・ ノードクイスト	ジ・ウンヒ	カトレオナ・マシュー ー
2008年	ロレーナ・ オチョア	ヤニー・ツェン	インビー・パク	申智愛
2007年	モーガン・ プレッセル	スサン・ ペテルセン	クリティー・ カー	ロレーナ・オチョア
2006年	カリー・ウェブ	朴・セリ	アニカ・ ソレンスタム	シェリー・ ステインハアー
2005年	アニカ・ソレンスタ ム	アニカ・ソレンスタ ム	バーディー・キム	張晶
2004年	グレース・朴	アニカ・ ソレンスタム	メグ・マローン	カレン・ スタップルズ
2003年	パトリシア・ メルニエ	アニカ・ ソレンスタム	ヒラリー・ ランケ	アニカ・ソレンスタ ム
2002年	アニカ・ ソレンスタム	朴セリ	ジュリー・ インクスター	カリー・ウェブ
2001年	アニカ・ ソレンスタム	カリー・ウェブ	カリー・ウェブ	朴・セリ
2000年	カリー・ウェブ	ジュリー・ インクスター	カリー・ウェブ	
1999年	ドットィー・ ペッパー	ジュリー・ インクスター	ジュリー・ インクスター	
1998年	パット・ハースト	朴・セリ	朴・セリ	

表 1-2 1998 年以降の男子 4 大メジャーチャンピオン一覧

開催年度	マスターズ	全米オープン	全英オープン	全米プロ
2010 年	P・ミケルソン	G・マクドウェル	R・ウースト ハウゼン	M・カイマー
2009 年	A・カブレラ	L・グローバー	S・シンク	Y・E・ヤン
2008 年	T・イメルマン	T・ウッズ	P・ハリントン	P・ハリントン
2007 年	Z・ジョンソン	A・カブレラ	P・ハリントン	T・ウッズ
2006 年	P・ミケルソン	G・オギルビー	T・ウッズ	T・ウッズ
2005 年	T・ウッズ	M・キャンベル	T・ウッズ	P・ミケルソン
2004 年	P・ミケルソン	R・ゲーセン	T・ハミルトン	V・シン
2003 年	M・ウェア	J・フューリック	B・カーティス	S・ミキール
2002 年	T・ウッズ	T・ウッズ	E・エルス	R・ビーム
2001 年	T・ウッズ	R・ゲーセン	D・デュバル	D・トムズ
2000 年	V・シン	T・ウッズ	T・ウッズ	T・ウッズ
1999 年	J・M・オラサバル	P・スチュアート	P・ローリー	T・ウッズ
1998 年	M・オメーラ	L・ジャンセン	M・オメーラ	V・シン

日本人プロゴルファーと比較しても、韓国人プロゴルファーは 2010 年度の世界主要 6 ツアー (USPGA, USLPGA, EUROPEAN TOUR, ASIAN TOUR, JGTO, JLPGA) の全てにおいて賞金ランキングの最上位選手が韓国人プロゴルファーであることがわかる。(表 1-3)

表 1-3 2010 年度世界主要 6 ツアーにおける日韓選手の賞金ランキング最上位比較

ツアー	韓国人最上位選手	日本人最上位選手
USPGA	K・J・チョイ(33 位)	今田竜二(86 位)
USLPGA	ナ・エン・チョイ (1 位)	宮里藍(6 位)
EUROPEANTOUR	ノ・スンヨル(38 位)	シード選手無し
ASIAN TOUR	ノ・スンヨル(1 位)	平塚哲二(5 位)
JGTO	キム・キョンテ(1 位)	藤田寛之(2 位)
JLPGA	アン・ソンジュ(1 位)	横峯さくら(2 位)

また、韓国人プロゴルファーの活躍は、各国ツアーにおける韓国人シード選手数の推移からも見ることができる。例えば、図 1-1 の JGTO と JLPGA における韓国人シード選手数の推移を見ると、1998 年の JGTO の韓国人シード選手は 1 人であったが、2010 年には 10 人となっている。また JLPGA の韓国人シード選手は、1998 年の時点ですでに 7 人であったが、2010 年には 13 人に増加している。

またアメリカの USLPGA でも、2000 年では朴・セリを含めて 2 人であったシード選手が、2010 年終了時点では 27 人まで増加しており、アメリカ人シード選手と同数にまで増加していることがわかる。(図 1-2)

この様に、1998 年の朴・セリのメジャー優勝を機に、韓国人プロゴルファーの世界での活躍が顕著となり、さらに韓国人シード選手の推移から近年の韓国人プロゴルファーの活躍は、一部のトップ選手のみではないということが言えるだろう。

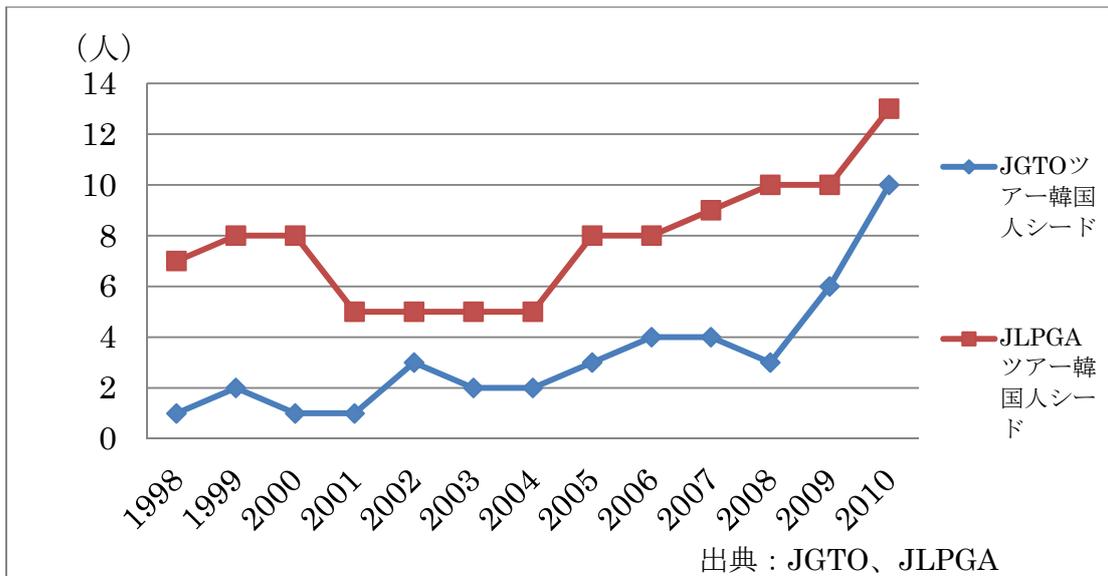


図 1-1 JGTO と JLPGA における韓国人シード選手数の推移

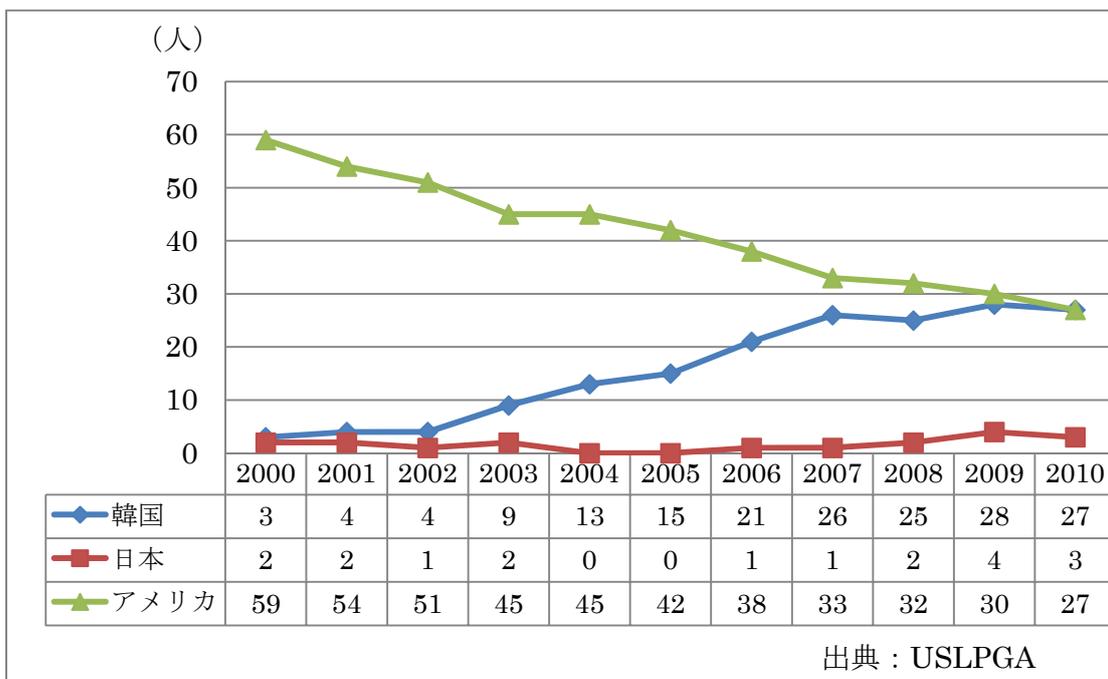


図 1-2 USLPGA における韓国人シード選手数の推移

第2項 韓国人ジュニアゴルファーの活躍

近年では韓国ジュニアゴルファーの活躍も顕著である。2002年に発足した日韓対抗中学・高校ゴルフ選手権は毎年日本で開催される、いわば日本のホームゲームであるが、2009年の第8回大会まで男女とも日本は韓国に1度も勝ったことがない。2010年の第9回大会で男子チームは勝利したものの女子チームは負けてしまった。

この日韓対抗中学・高校ゴルフ選手権だけではなく、表1-4の2010年日韓ナショナルチームの国際大会における団体戦の結果を見ても、韓国は日本よりも優秀な成績を収めていることがわかる。また日本アマチュアゴルフ選手権では2001年から2010年までの10年間に、2010年日本男子ツアー賞金王のキム・キョンテを含めて3人の韓国人がチャンピオンに輝いている。表1-4からも韓国が日本に比べて優秀な成績を上げていることがわかるが、日韓の中学生と高校生のゴルフ人口は図1-3が示すように、日本は韓国の約3.5倍である。

表 1-4 2010年日韓ナショナルチームの国際大会における団体戦成績

大会(男子の部)	韓国代表	スコア	日本代表	スコア	参加数
世界アマチュアゴルフ選手権	13位タイ	445(+15)	17位タイ	446(+16)	69の国と地域
広州アジア競技大会	優勝	842(-22)	6位	878(+14)	19カ国
ネイバーズトロフィーチーム選手権	優勝	641(-7)	2位	650(+2)	3カ国
大会(女子の部)	韓国代表	スコア	日本代表	スコア	参加数
世界アマチュアゴルフ選手権	優勝	546(-30)	24位	585(+9)	52の国と地域
広州アジア競技大会	優勝	560(-16)	4位	586(+10)	10カ国
ネイバーズトロフィーチーム選手権	優勝	436(+4)	2位	445(+13)	3カ国
クィーンシリキットカップ	優勝	420(-12)	7位	442(+10)	12カ国

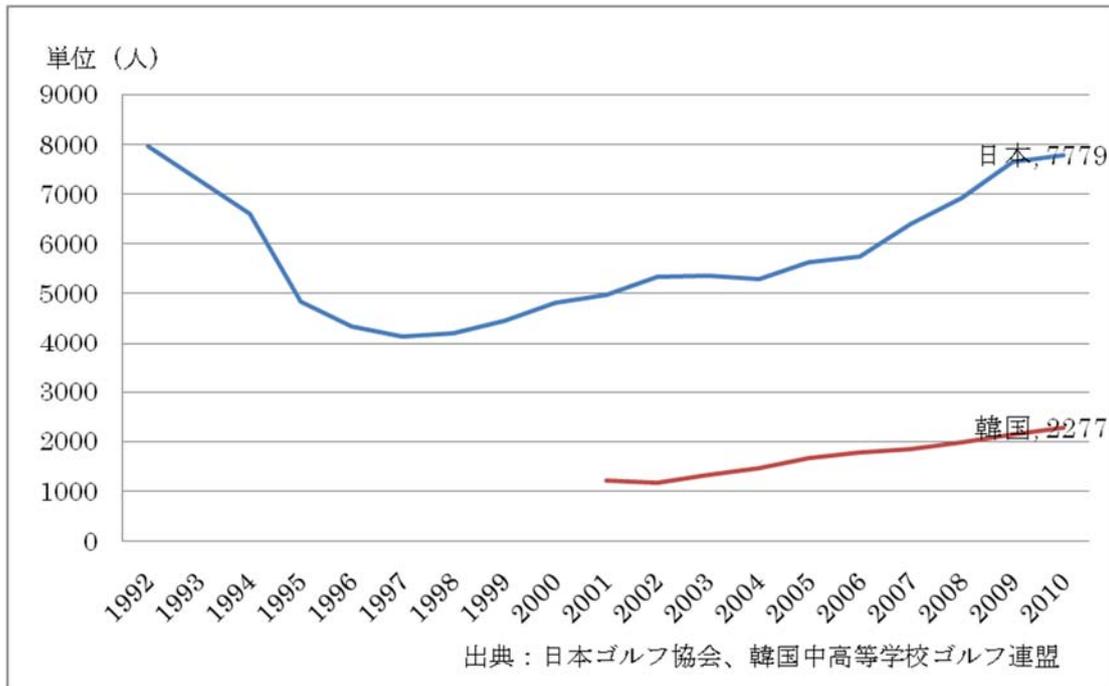


図 1-3 日韓の中高校生の協会登録人数の推移

第3項 韓国のゴルフ環境

韓国のゴルフ環境は、ジュニアゴルファーが練習するためには決して良いとはいえない。表 1-5 に示すように、韓国のゴルフ場数は世界上位 5 位までの国と比べて、非常に少ない。また、人口でゴルフ場数を割った 1 ゴルフ場あたりの人口が多いことがわかる。

表 1-5 2007 年度ゴルフ場数上位 5 国と韓国の人口及びゴルフ人口密度
出典：韓国レジャー白書

国	ゴルフ場数	人口	1 ゴルフ場数あたりの人口
アメリカ	15,590	305,826	19,617
日本	2,442	127,967	52,403
カナダ	2,300	32,876	14,294
イギリス	1,911	69,769	31,800
オーストラリア	1,800	20,743	11,524
韓国	280	48,456	173,057

次にゴルフ場のプレーフィーに関しては以下のようにになっている。

ゴルフ場のプレーフィーは通常、入場料（グリーンフィー）、キャディーフィー、カート使用料、税金の合計になる。しかし、ジュニアゴルファーのプレーフィーは、ゴルフバッグを担いでプレーするため、キャディーフィーとカート使用料が掛からない。このことから韓国ジュニアゴルファーのプレーフィーは、入場料と税金であるといえる。

図 1-4 から、韓国は日本以上にゴルフの入場料が高いことがわかる。さらに韓国のプレーフィーを高くしている原因は入場料だけではない。そのラウンドに掛かる 76120 ウォン（2007 年韓国レジャー白書より）の高額な税金もコストが高くなる理由である。

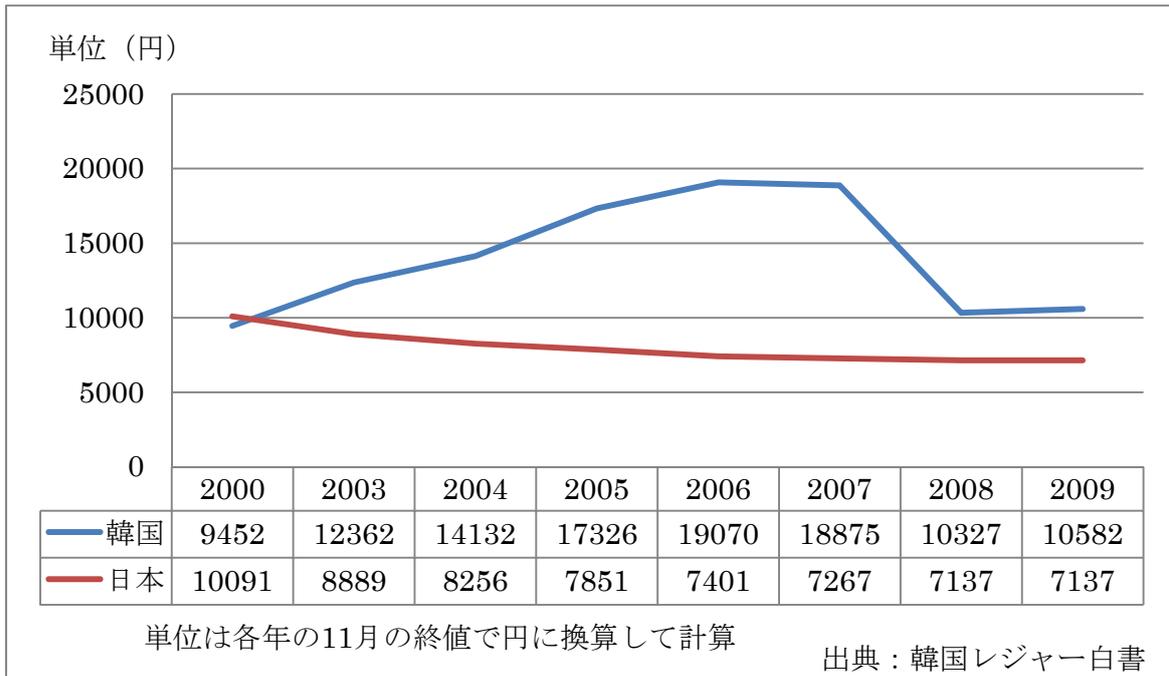


図 1-4 日韓のビジターの平日入場料（グリーンフィー）推移

筆者は1998年からプロゴルファーのコーチとして、その当時日本には存在しなかったツアーに帯同して選手のコーチングを行うスタイルを確立した。そして現在に至るまで多くの選手とタッグ組み優勝の喜びを分かち合ってきた。そしてゴルフ界への感謝と次世代への夢を託すために2002年からジュニアスクールを開校してジュニアゴルファーの育成及び強化を行っている。このような経歴を持つ筆者は、近年の日本男子ツアーの試合数の減少や、韓国人プロゴルファーの世界的活躍に危惧を覚えている。筆者の研究の動機は、今から10年後に韓国勢に負けないために、韓国の育成及び強化を研究することで、日本で可能な育成及び強化策を見出す事の必要性を強く感じたからである。

第2節 先行研究

韓国のスポーツのジュニア育成に関する研究としては、韓国の体操競技のジュニア育成システムを、指導者や競技団体の関係者へのインタビュー調査から明らかにした中村ら（2006）の論文が存在する。

日本のゴルフのジュニア育成に関しては、片山ら（2004）がゴルフ練習場及びゴルフ場の社会的責任・役割と経営戦略に着目し、ジュニア育成の責任があることを述べている。

一方、その他のスポーツのジュニア育成に関する研究としては、テニスクラブにおけるジュニア育成に関して研究した黒須（1987）、バドミントンのジュニア選手を対象とした北村ら（2009）や、フランスのサッカー選手育成システムに着目し、日本のサッカー選手育成を改革するに資する資料を得ることを目的とした松原ら（2009）の研究が存在する。また、海外と日本のジュニア育成システムを比較した研究としては、イギリスのスポーツに関するジュニア選手の育成・発掘のシステムを検証し、日本におけるジュニア育成方法との比較を試みた伊藤ら（1999）の論文が存在する。

以上のように、サッカーやテニスにおけるジュニア育成に関する研究は行われているものの、ゴルフにおけるジュニア育成に関する研究は十分ではなく、また、韓国ゴルファーの躍進の要因を明らかにした研究が存在しない。

第3節 研究目的

前述のように、近年の韓国人プロゴルファーの著しい活躍は明らかである。そこで本研究では、日本におけるジュニア育成への示唆を得るため、韓国におけるプロゴルファーの強化・育成の要因を明らかにすることを目的とする。

第2章 研究手法

第1節 韓国現地調査とインタビュー調査

近年の韓国人プロゴルファーの活躍の理由を明らかにするために、第1節では韓国の現地調査とインタビュー調査を行った。現地調査では、2010年アジアツアー賞金王のノ・スンヨル、2010年日本ゴルフツアー賞金王のキム・キョンテ、2010年USLPGAツアー賞金女王のシン・ジエを輩出した韓国北東部にあるソクチョに行き、練習場やショートコースなどジュニアゴルファーの練習環境を調査した。またインチョンにできた世界最大のゴルフ練習場（ドリームゴルフレンジ）内のジュニアアカデミー10校についても、施設、練習環境、そしてコストを調査した。

インタビューはトップ選手、トップコーチ、韓国中高等学校ゴルフ連盟、日本ゴルフ協会と幅広く行った。

まず、トップ選手として2010年アジアツアーの賞金王ノ・スンヨル選手と日本ゴルフツアーのシード選手であるキム・ヒョンソンに行く。そこでジュニア時代の練習量や意識、ナショナルチームや兵役についてのインタビュー調査を行った。

次に、トップコーチとしてノ・スンヨルを育てたチョイ・ミュンホに、近年韓国ジュニア育成でどのような指導を行ってきたか、韓国のジュニア育成事情のインタビューを行った。

また、韓国ゴルフ界から急激に優秀な選手が輩出されてきた理由を、韓国中高等学校のマネージングディレクターであるキム・スンキュにもインタビュー調査を行った。

最後に、財団法人日本ゴルフ協会の主事である内田愛次郎に韓国ナショナルチームの練習についてインタビューを行った。

第2節 日韓プロゴルファーに対するアンケート調査

日韓プロゴルファーに対して、ゴルフを始めた経緯、練習量、練習に対する意識などについてアンケート調査を行った。

アンケート項目は以下の通りである。

- ・回答者の特性
- ・ゴルフに関する意識
- ・練習内容及び環境

なお、日本人プロゴルファーには対面してアンケート、電話によるアンケートを行った。また、韓国人プロゴルファーには全て対面してアンケートを行った。

調査対象のプロゴルファーは匿名だが、対面アンケートのため彼らのプロフィールについては筆者が特定した。

第3章 韓国におけるゴルファー育成の現状

第1節 韓国の練習環境

現地調査をおこなったソクチョのパインレッジゴルフリゾート内にあるパインレッジゴルフアカデミーは、レッスンとボール代とショートコースのラウンド料金が分かれていることがわかった。ノ・スンヨルを育てたチョイ・ミュンホによるレッスンはジュニアゴルファーでも一般アマチュアゴルファーでも1レッスン1時間で25万ウォンかかる。ボール代、インドアのパッティングスペースの施設使用料はジュニアの特別料金の設定がある。それは1カ月ボール打ち放題で12万ウォン。ショートコースは1日8000ウォンでラウンドし放題である。仮に月4回チョイ・ミュンホのレッスンを受けて月20回ラウンドしたとすると128万ウォンである。(表3-1参照)

表 3-1 パインレッジゴルフリゾート (ソクチョ) の情報

施設情報	パインレッジゴルフリゾート
練習場の距離	190 ヤード
打席数	45 打席
ショートゲームスペース	あり
ショートコース	9 ホール
ゴルフアカデミーの数	1 (パインレッジゴルフアカデミー)
レッスンフィー(チョイ・ミュンホ)	1 レッスン 25 万ウォン(1 時間)
施設使用料	12 万ウォン(1 カ月打ち放題ジュニア料金)
ショートコース(9 ホール)	8 千ウォン(ジュニア料金)

一方、インチョンにある世界最大の練習場であるドリームゴルフレンジには10校のゴルフアカデミーが存在していることがわかった。コストはレッスンフィーが1カ月で150万ウォン。施設使用料は、ドライビングレンジとショートゲームの練習スペース使用で1カ月50万ウォンである。しかし、時間には制限があり打ち放題というわけではない。7ホールのショートコースも併設されているが料金は別で1回につき5万ウォンがかかる。仮にショートコースを月20回ラウンドしたとすると300万ウォンかかる計算になる。(表3-2参照)

表 3-2 ドリームゴルフレンジ（仁川）の情報

施設情報	ドリームゴルフレンジ(仁川)
練習場の距離	400 ヤード(360 度から打てる)
打席数	300 打席
ショートゲームスペース	あり
ショートコース	7 ホール
ゴルフアカデミーの数	10(ドリームゴルフレンジ内)
レッスンフィー	150 万ウォン(1 カ月間)
施設使用料(1 カ月)	50 万ウォン(レンジ、ショートゲーム込)
ショートコース(7 ホール)	5 万ウォン(1 回)

ソウルのゴルフ練習場にも現地調査を行ったがアカデミーが存在していてもジュニアゴルファーを対象にしていないものも多く、ジュニア向けのアカデミーが郊外の練習場に多く存在していることがわかった。またノ・スンヨルのコーチであるチョイ・ミュンホのインタビューから韓国のゴルフアカデミー平均的コストは、一カ月あたり 250 万ウォンであることがわかった。また運営方法については一般的に指導、練習場の打ち放題、平日の一般客のいなくなった 3 時以降にショートコースや通常のコースをラウンドする場合は多い事が明らかになった。

第2節 ノ・スンヨルとキム・ヒョンソンのインタビュー

本節では、2010年度アジアツアー賞金王のノ・スンヨルと2010年度日本ゴルフツアー賞金ランキング60位でシード権を獲得したキム・ヒョンソンのインタビュー結果から韓国のトップ選手のジュニア時代の練習環境と練習量を調査した。またナショナルチームの活動について聞くとともに兵役に関する意識調査もおこなった。

第1項 ジュニアゴルファー時代の練習環境と練習量について

キム・ヒョンソンへのインタビュー取材からキム・ヒョンソンが毎日1000球練習を行う場合は自主的の時もあるがコーチや親によって強制的にやらされた場合もあることがわかった。また学校生活に関しては、平日は午前で授業が終了し昼から夜まで練習をおこなっていたことがわかった。ラウンドに関しては試合も含めて平日しかできないようで、土日のラウンドは無かったことがわかった。よって土日は朝から晩まで練習場でボールを打っていたことがわかった。インタビュー内容をまとめたものが表3-3と表3-4である。

表 3-3 キム・ヒョンソンへのインタビュー結果（中学生時代）

中学生時代	
ゴルフを始めたのは何歳か？	15歳
1週間に何回練習したか？	毎日
練習時間は何時間か？	6～7時間
1回の練習で何球打ったか？	1000球
1カ月に何回ラウンドに行ったか？	7～8回
この時代の指導者は誰か？	特になし
練習は自主的または強制的だったか？	どちらとも言えない

表 3-4 キム・ヒョンソンへのインタビュー結果（高校生時代）

高校生時代	
1週間に何回練習したか？	毎日
練習時間は何時間か？	6～7時間
1回の練習で何球打ったか？	1000球
1カ月に何回ラウンドに行ったか？	7～8回
この時代の指導者は誰か？	プロゴルファー
練習は自主的または強制的だったか？	どちらとも言えない

次に、ノ・スンヨルへのインタビュー取材の結果、小学生の時から学校に行かずに練習していたことがわかった。練習は朝から行い、夏場にはショートコースを午前4時30分か

ら最初の一般客が来るまでラウンドし、その後練習場でショット練習を午後3時まで行った後、ショートコースで日没までラウンドするといった練習を毎日繰り返していたことがわかった。ショートコースで練習した平均時間は毎日3～4時間であるという。インタビュー内容をまとめたものが表3-5と表3-6である。

表 3-5 ノ・スンヨルへのインタビュー結果（小学生時代）

小学生時代	
ゴルフを始めたのは何歳か？	7歳
1週間に何回練習したか？	毎日
練習時間は何時間か？	10時間
1回の練習で何球打ったか？	200球以上 300球未満
1カ月に何回ラウンドに行ったか？	7～8回
この時代の指導者は誰か？	特になし
練習は自主的または強制的だったか？	どちらとも言えない

表 3-6 ノ・スンヨルへのインタビュー結果（中学生時代）

中学生時代	
1週間に何回練習したか？	毎日
練習時間は何時間か？	12時間
1回の練習で何球打ったか？	400球以上 500球未満
1カ月に何回ラウンドに行ったか？	12回(ナショナルチーム入り後は20回)
この時代の指導者は誰か？	プロゴルファー(チョイ・ミュンホ)
練習は自主的または強制的だったか？	どちらとも言えない

第2項 兵役に関するインタビュー

韓国のジュニアゴルファーにとってナショナルチーム入りは大きな意味を持っていることが明らかになった。それは韓国の兵役と関係している。韓国人の男性にとって兵役は義務である。2011年度現在、男子ゴルファーが兵役免除される為には、アジア競技大会の金メダルが条件である。しかし、2016年以降はゴルフがオリンピック競技になったためにオリンピックの3位以内とアジア競技大会の金メダルが兵役免除になる。

プロゴルファーにとって現役時に2年間兵役に行くことの負担は非常に大きいといえる。実際に兵役に行ったキム・ヒョンソンは、兵役に服していた2年間、ゴルフ練習はもちろんゴルフクラブを握ることすらできなかったそうである。また、兵役の訓練時に事故で亡くなったり、怪我によって現役復帰できなくなったりしてしまう選手もいたそうである。このことから韓国の男性にとって兵役がいかに過酷な事であるかが窺える。このような現実もあって

ゴルフを子供にやらせることを望む親は、幼少期もしくは子供が生まれる前にアメリカやニュージーランドのようなゴルフが盛んで、かつ韓国よりも安価でゴルフのラウンドや練習ができる国に家族ごと移住する場合がある。こうすることによって他国の国籍を取得できるため、兵役の義務が無くなるからである。

第3節 韓国ナショナルチームについてのインタビュー

本節では、財団法人日本ゴルフ協会の内田愛次郎のインタビューと韓国ナショナルチームに所属していたノ・スンヨルへのインタビューにより、韓国ナショナルチームのシステムや選手に対してのサポート、そして練習量や選手にとって韓国ナショナルチーム入りがどんな意味を持っているのかを明らかにした。内田愛次郎は現在日本ナショナルチームを率いている。そのため韓国ナショナルチームの情報を韓国ゴルフ協会や選手から聞くことができた。

第1項 韓国ナショナルチームの選抜方法

韓国ゴルフ協会のホームページでは、韓国ナショナルチームの選抜基準が明記されている。ナショナルチームに選抜されるためには、表 3-7に記載されている大会に出場してポイントを稼ぐ必要がある。ポイントは大会の規模やステータスによって異なる。最もポイントの大きな大会は、KGA 主管のオープン競技、アジア競技大会、世界アマチュアゴルフ選手権の3試合であり、それらの試合の優勝者には200ポイントが与えられる。また150ポイント獲得できる大会は韓国アマチュアゴルフ選手権や韓国女子アマゴルフ選手権など国内最高のアマチュア選手権、それ以外にも日本オープンや日本アマチュアゴルフ選手権なども含まれる。100ポイントの大会は、クイーンシリキットカップのような3カ国の国際対抗戦や大学生、高校生、中学生、小学生の各連盟会長杯などがある。50ポイントの大会は各連盟で行われる大会であることがわかった。

また、その大会の得点配分を表 3-8に示す。

表 3-7 韓国ナショナルチーム ポイント加算大会一覧

得点	試合名
200 ポイント	KGA主管オープン
	アジア競技大会
	世界アマチュアゴルフ選手権
150 ポイント	韓国アマチュアゴルフ選手権
	韓国女子アマチュアゴルフ選手権
	USオープン及びUSアマチュアゴルフ選手権
100 ポイント	日本オープン及び日本アマチュアゴルフ選手権
	台湾オープン及び台湾アマチュアゴルフ選手権
	クイーンシーキットカップ
	アジア太平洋ゴルフチーム選手権
	世界大学選手権 世界
	松岩(ソナム)杯
	全国体育大会
	韓国ジュニア(初等部含む)
	湖心杯
	イクソン杯
	KB 国民銀行杯
	MBC 青少年ゴルフ最強戦(初等部は 50 点)
	韓国大学ゴルフ連盟会長杯
韓国小学校ゴルフ連盟会長杯	
50 ポイント	済州道(チェジユド)支社杯(倍)(初等部含む)
	アジアジュニアゴルフ選手権
	アジアジュニアゴルフ選手権
	全国大学校大会(年 5 個) 全国高等学校大会(年 9 個) 全国中学校大会(年 9 個) 全国小学校大会(年 4 個)
	(※注)中高校生が中高連盟主催(主管)9大会に4大会以上出場したとしてもその中の良い成績4試合のポイントを加算する。

表 3-8 大会の得点配分

200点 試合		150点 試合		100点 試合		50点 試合	
順位	配点	順位	配点	順位	配点	順位	配点
1	200	1	150	1	100	1	50
2	160	2	120	2	80	2	40
3	130	3	98	3	65	3	33
4	110	4	83	4	55	4	28
5	90	5	68	5	45	5	23
6	80	6	60	6	40	6	20
7	70	7	53	7	35	7	18
8	60	8	45	8	30	8	15
9	50	9	38	9	25	9	13
10	45	10	34	10	23	10	11

韓国ナショナルチームに選抜されるためには試合に出場して得点を稼ぐ必要がある。その得点上位の男女各6人、合計12人が韓国ナショナルチームメンバーとなる。それ以外にも韓国には育成枠があることがわかった。それは、小学生5、6年生から男女各4人、中学生から男女各11人、高校生から男女各13人、大学生から男女各3人選抜されることがわかった。(表 3-9)

また韓国ナショナルチームメンバーは一年間固定ではなく試合ごとにリランキングが行われ、育成枠との入れ替えが活発にあることがわかった。

表 3-9 韓国ナショナルチームと各年代の育成枠の人数

	男性	女性	合計
小学生(5~6年生)	4人	4人	8人
中学生	11人	11人	22人
高校生	13人	13人	26人
大学生	3人	3人	6人
ナショナルチーム	6人	6人	12人
合計	37人	37人	74人

第2項 韓国ナショナルチームの育成方法

日本ゴルフ協会の内田愛次郎のインタビュー調査と2006年に韓国ナショナルチームに在籍したノ・スンヨルのインタビュー調査の結果、そして韓国スポーツ界を統括する韓国大韓体育会の強化費の調査の結果、韓国ナショナルチームの強化方法と経緯が明らかになった。

韓国大韓体育会の資料の中で、2007年度と2008年度は競技力サポート費として15億ウォンが韓国ゴルフ協会に支給されていることがわかった。

この資金でそれまで以上に選手強化に力を入れ、年間300日間の合宿を行っている。合宿では、練習、ラウンド、ナショナルトレーニングセンターを使用したトレーニングやメンタルトレーニングを行い、選手を管理していることがわかった。また、年間300日の合宿は、50日間で6回に分けて様々な場所で行われている。この50日の中でも場所を移動して、1月には日本の宮崎で合宿を行うということがわかった。これらの経費は、全て韓国ゴルフ協会が負担していることが明らかになった。

それ以外にも、韓国ナショナルチームには様々な特権が与えられることがわかった。例えば、韓国ナショナルチームに在籍して2年間育成枠に降格しなければ、プロ転向後に韓国プロゴルフツアーのシード権を与えられるというものである。

また男子にとって大きなメリットは、アジア競技大会で金メダルを獲得すれば兵役を免除されるということである。

この様に、300日間の合宿と選手のモチベーションを上げるための施策があることが明らかになった。

第4節 韓国の指導方法に関するコーチのインタビュー

本節では、ノ・スンヨルのコーチであるチョイ・ミュンホのインタビューから韓国のジュニアゴルファーの指導方法や練習環境を明らかにした。韓国のジュニアゴルファーの指導方法は、親もコーチもスパルタ方式が一般的であることがわかった。スパルタ方式とは、ジュニアゴルファーの意思とは関係なく強制的に練習させることである。

さらに、練習は毎日長時間に及び、毎回の球数も 500 球以上であることが多いことが明らかになった。韓国では「プロになりたいければ 1000 球打て、シード選手になりたいければ 2000 球打て」という格言があるほど圧倒的な練習量が常識であることがわかった。

また、多くのジュニアゴルファーがゴルフを始めた後、学校に通学しないで朝から晩まで練習することが一般的であることもインタビュー取材から明らかになった。現地取材でも平日の朝から練習を行っているジュニアゴルファーを発見することができた。その中には小学生も含まれていた。(写真 1)

小中学生が学校に通学しないことは、韓国の法律でも違法である。しかしながら、誰一人として平日の日中から小中学生がゴルフを練習しているという状況に対して問題視する人がいないことがわかった。



写真 1 韓国ジュニアゴルファーの練習風景

第5節 韓国中高等学校ゴルフ連盟のインタビュー

本節では韓国中高等学校ゴルフ連盟のマネージングディレクターであるキム・スンキュにインタビューを行い、協会の目的や強化方法、また運営方法を明らかにした。組織の全体像は、表3-10の通りである。

表 3-10 韓国中高等学校ゴルフ連盟の情報

発足	1989年
役員	教員
目的	選手強化
試合	年間9試合を主催(平日)
ジュニア年会費	5万ウォン
会員数	2277人(2010年度)
スコア管理システム	選手、親、コーチが見る

第1項 韓国中高等学校ゴルフ連盟の目的

キム・スンキュのインタビューから、韓国中高等学校ゴルフ連盟の目的は強化にあることがわかった。また、ほとんどのジュニアゴルファーが学校に通っていない状況をどのように思っているか意見を聞いたところ、「韓国は日本と違ってゴルフ環境が悪い。したがって、平日にラウンドや練習をしないと強化できない。また、学校に行くか行かないかは親が判断することである。」と述べた。

第2項 韓国中高等学校ゴルフ連盟の試合

韓国中高等学校ゴルフ連盟の強化方法は、2つあることがわかった。1つ目は、年間9試合のジュニアゴルフ大会の開催である。この試合は出場人数が多いため、月曜日から水曜日のいずれか1日に参加して予選ラウンドを行い、木曜日と金曜日の2日間で決勝大会が開催される。試合のエントリー料は3万ウォンで、韓国中高等学校ゴルフ連盟に支払われる。また、ゴルフ場に支払われるラウンド料はコースによって変化し、試合中は通常の料金に比べて5%~10%の割引が適用される。このジュニア大会開催時にも、ゴルフ場には一般のゴルファーがラウンドに来るため、朝早くからスタートする試合もある。

この中の全試合が韓国ゴルフ協会のポイント加算対象試合であり、その内、一番大きなジュニア大会1試合が100点、残りの8試合が50点である。

このなかで、成績が良かった4試合のポイントを加算してナショナルチームや育成選手入

りに必要なポイントを稼ぐ仕組みになっている。またこのポイントで成績上位 30%は、ゴルフ場に掛かる消費税の免税対象者になることができる。この 2 つが試合に出場する動機となって、多くのジュニアゴルファーがすべての試合に参加している。

韓国中高等学校ゴルフ連盟が主催しているジュニア大会以外にも、スケジュールが重ならない週に韓国ゴルフ協会が主催しているジュニア大会が 12 試合ある。これもまたポイント対象の試合となっており、ほとんどのジュニアゴルファーが参加していることがわかった。

韓国中高等学校ゴルフ連盟と韓国ゴルフ協会が主催しているジュニア大会の合計は 21 試合あるが、韓国のルールでは年間 3 試合の出場規制ルールが存在している。しかし、協会の試合やシステムをみてもわかるように、誰もそのルールを守っているジュニアゴルファーはいないことがわかった。

第 3 項 スコア管理システムについて

韓国中高等学校ゴルフ連盟は、2000 年から連盟に所属する全てのジュニアゴルファーのスコア管理をしていることがわかった。スコアデータは、中高等学校ゴルフ連盟が主催した試合のスコアやパター数などを集計して、ホームページで公開されていることが明らかになった。公開されているのは上位選手だが、下位の選手も個別にデータを見ることができるとわかった。

これには、18 ホールの平均ストローク、平均パット数、平均パーオン率、リカバリー率のデータと順位が記載されている。選手や親、コーチがこれを見ることによって弱点がどこにあるのかを共有することができ、練習の効率化のために非常に有益な情報である。また他の選手と対比できることで競争心を高める役割もあることがわかった。

第 4 項 韓国中高等学校ゴルフ連盟の運営資金

韓国中高等学校ゴルフ連盟の運営資金の調達には、以下 4 つの方法があることが明らかになった。

第一に、年間 5 万ウォンのジュニア年会費である。これによって 2010 年度は 11385 万ウォンの収入があった。

第二に、大会のエントリー料である。これは 1 試合エントリーごとに 3 万ウォンを協会に支払うものである。

第三に、韓国中高等学校ゴルフ連盟主催のジュニア大会 9 試合中の 8 試合にスポンサーがついていて、それぞれの試合に 600 万ウォンから 1000 万ウォンの協賛金が連盟に入ることがわかった。

第四に、韓国中高等学校ゴルフ連盟には、連盟そのものに 10000 万ウォンから 20000 万ウォンの企業スポンサーを付けて運営資金に回している。

これらの収入をウェブサイトの運営資金に使ったり、海外のメジャージュニア大会の派遣費に使ったり、協会の事務所の家賃や専属スタッフの賃金に充てたりしていることがわかった。

第4章 日韓プロゴルファーのジュニア時代の練習状況

本章では、日韓プロゴルファーに関して、ゴルフを始めた経緯、練習量、練習内容、指導者、練習に対する意識などについてアンケート調査を行い、その結果を分析した。

・アンケートの調査対象

本調査では、2010年度日本人シード選手45名を含む日本人トーナメントプレイヤー90名、及び2010年度韓国人シード選手8名を含む韓国人トーナメントプレイヤー11名を対象とし、質問用紙を配布してアンケート調査を実施した。

・アンケート実施日時：2010年10月5日（火）～11月2日（火）

調査用紙配布数：日本人プロゴルファー 90枚、韓国人プロゴルファー11枚

合計回収数：日本人プロゴルファー 90枚、韓国人プロゴルファー11枚（回収率100%）

・アンケート実施方法：2010年度キャノンオープンとブリジストンオープンで質問用紙を直接選手に配布してアンケート調査を実施及び回収した。また、韓国現地調査にてインタビュー中にアンケート調査を実施及び回収した。最後に、日本人選手に関してはトーナメント経験者に電話でアンケート調査を行った。

本研究では、日韓プロゴルファーのゴルフを始めた経緯、練習量、指導者、練習に対する意識を主に分析で使用する事から、それら全ての項目を回答したものを有効回答とした。その結果、有効回答数は日本人プロゴルファー：90枚、韓国人プロゴルファー：11枚、有効回答率は日本人プロゴルファー：100%、韓国人プロゴルファー：100%となった。

第1節 回答者属性

本アンケート調査の回答者属性は以下の通りである。

年齢構成は韓国人プロゴルファーの10代の選手が9%、20代が64%、30代が27%であった。また、日本人プロゴルファーの10代の選手は一人もいなかった。20代は22%、30代は56%、40代は21%、50代は1%であった。(図4-1)

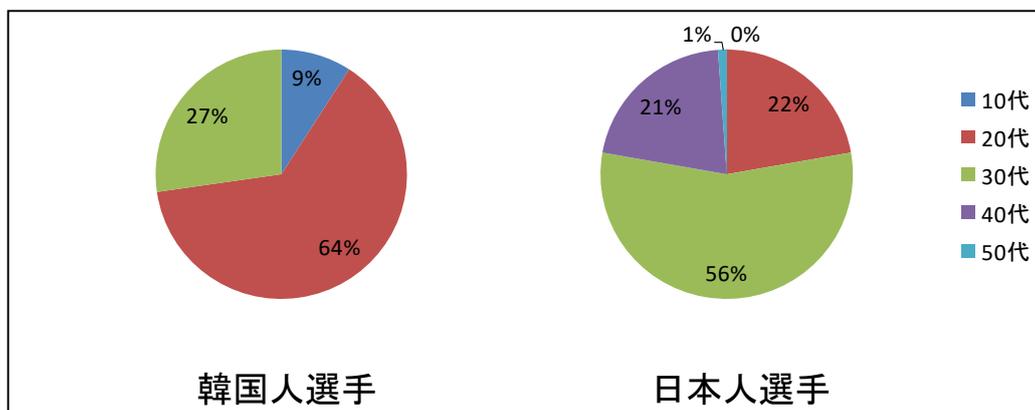


図 4-1 年齢構成

次に、アンケート対象者の現在の状況を図4-2のようなカテゴリーに分けて整理した。2010年度終了時点で韓国人プロゴルファーの7%がヨーロッパツアーシード権取得者だった。22%がアジアツアーシード権取得者、57%がJGTOツアーシード権取得者だった。それ以外のトーナメント選手は14%であった。

一方、日本人プロゴルファーは、3%がアジアツアーシード権取得者だった。49%がJGTOツアーシード権取得者、19%が元JGTOシード権取得者、29%はそれ以外のトーナメント選手であった。

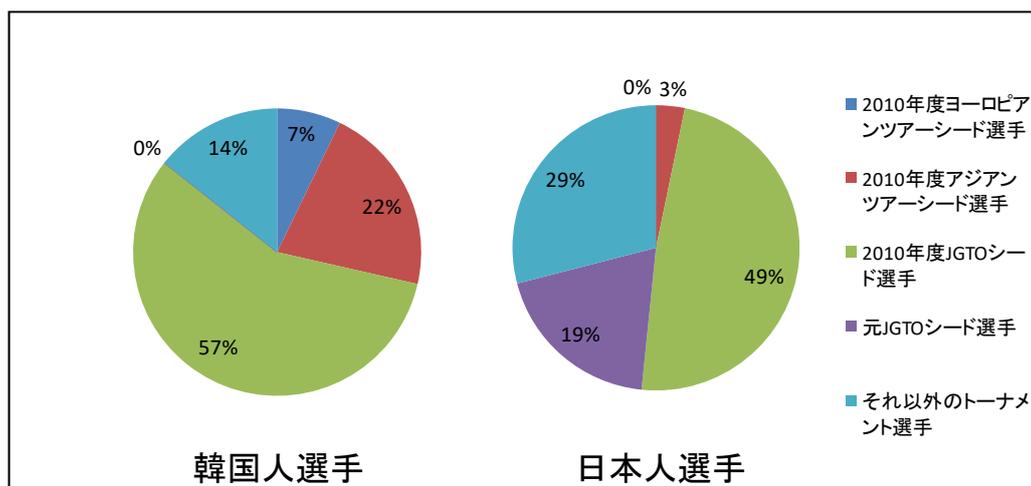


図 4-2 回答者カテゴリー

第2節 日韓プロゴルファーへのアンケート調査結果

本節では、日韓プロゴルファーへのアンケート調査を分析する。

第1項 ゴルフに関する意識について

本項では、日韓プロゴルファーがゴルフを始めた時期や理由、意識に関する回答結果を分析する。

図 4-3 より、韓国人プロゴルファーの 64%が「小学生」からゴルフを始めていることがわかった。また 27%は「中学生」で始め、「高校生」で始めたのは 9%であった。

一方、日本人プロゴルファーは「小学生未満」でゴルフを始めている選手が 11%いることがわかった。そして「小学生」から始めている選手が最も多く 46%、「中学生」で始めた選手は 22%いた。また、「高校生」で始めた選手は 17%いることが明らかになった。

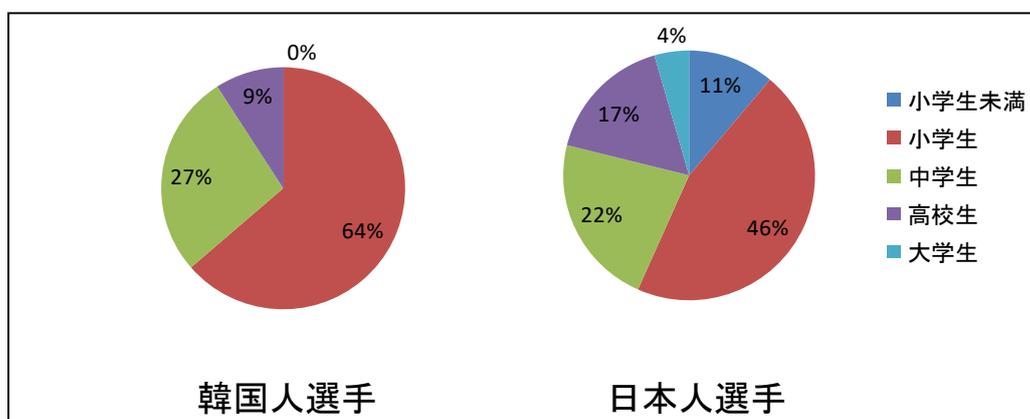


図 4-3 ゴルフを始めた時期

図 4-4 より、ゴルフを始めた理由は韓国人選手の 91%の選手が「親の勧め」であることがわかった。残りの 9%は「その他」であった。

一方、日本人選手は 64%が「親の勧め」であることがわかった。続いて「憧れのプロの影響」が 8%いることが明らかになった。また「兄弟がやっていたから」は 4%、「友達をやっていたから」は 7%いることが分かり、「その他」は 17%であり、韓国人選手よりかなり多かった。

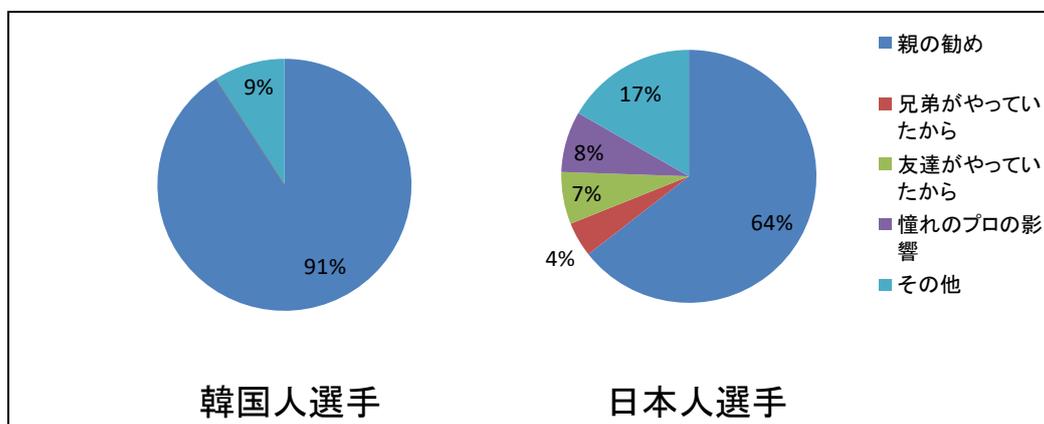


図 4-4 ゴルフを始めた理由

図 4-5 より、87%の韓国人プロゴルファーがゴルフ以外の習い事を行っており、最も多かったものは「サッカー」の 34%であった。

一方、日本人プロゴルファーでは、最も多かったものは「野球」の 30%、次いで「水泳」の 18%であることが明らかになった。

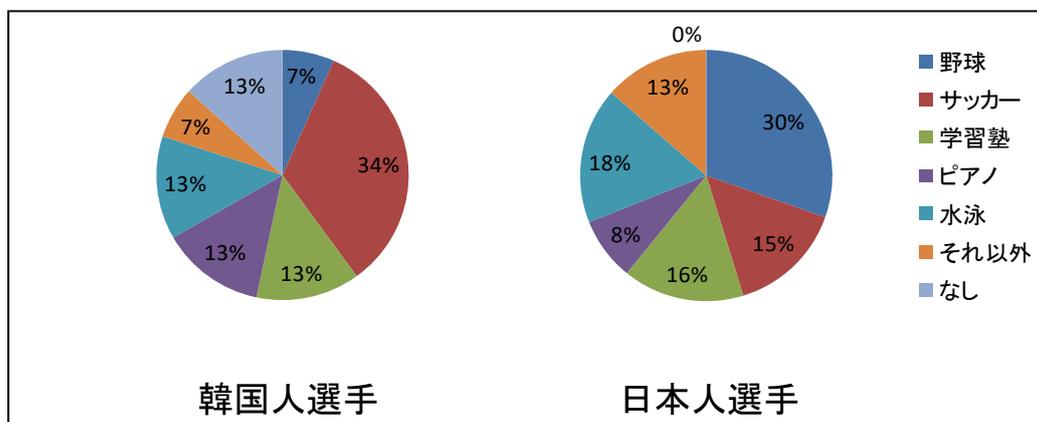


図 4-5 ゴルフ以外の習い事

図 4-6 より、韓国人プロゴルファーの 82%は「プロゴルファー」志望だったことがわかった。

一方、日本人プロゴルファーも 55%が「プロゴルファー」志望と最も多かったが、比率には 27%の開きがあった。また、日本人プロゴルファーのジュニア時代の夢の 23%は「プロゴルファー以外のスポーツ選手」だった。そして 18%の選手は「その他」と回答した。

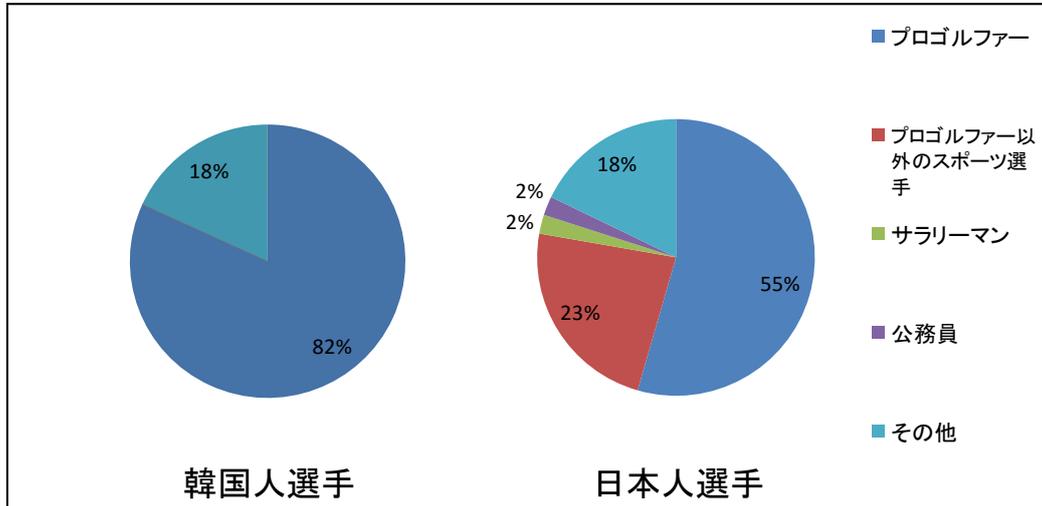


図 4-6 ジュニアゴルファー時代の夢

日韓プロゴルファーがジュニアゴルファーだったときの、ゴルフに対する意識を調査したものが図 4-7 である。韓国人プロゴルファーの過半数以上である 46%が、ジュニア時代にゴルフが「大好き」だったと回答し、続いて 45%が「好き」、「普通」は 9%であった。一方、日本人プロゴルファーが「大好き」と回答したのは 59%、続いて 19%が「好き」と回答し、14%が「普通」と答えた。日本人プロゴルファーの中の 8%は「嫌い」だったことがわかった。

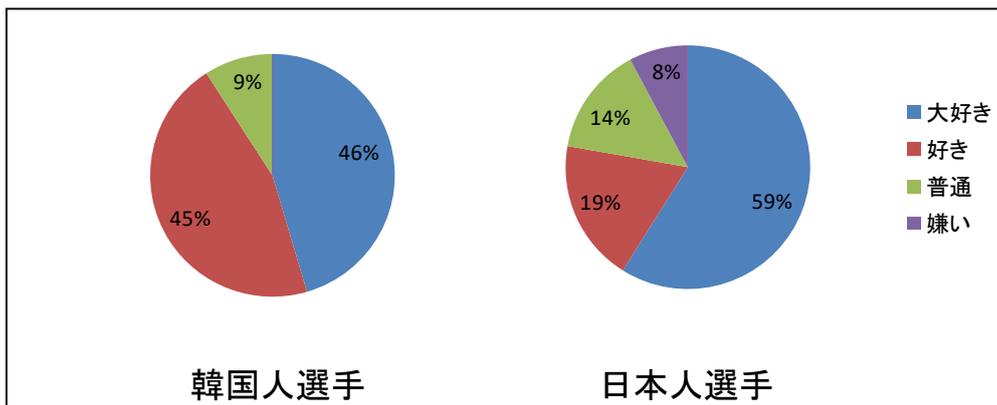


図 4-7 ゴルフは好きだったか

第2項 練習内容や環境について

本項では、日韓プロゴルファーの練習内容及び練習環境に関する回答結果を分析する。

図 4-8 より、韓国プロゴルファーはゴルフを始めたときから、ほぼ毎日練習していることが明らかになった。韓国プロゴルファー回答者の中で、最も1週間の練習回数が少なかったのは「4回」であった。

一方、日本人プロゴルファーは小学生未満から大学になるにつれて、週に「1回」と回答した割合が徐々に減少していることがわかる。そして、毎日練習している選手は小学生未満から高校生にかけて徐々に増えていたが、大学生になると若干減少していることが明らかになった。

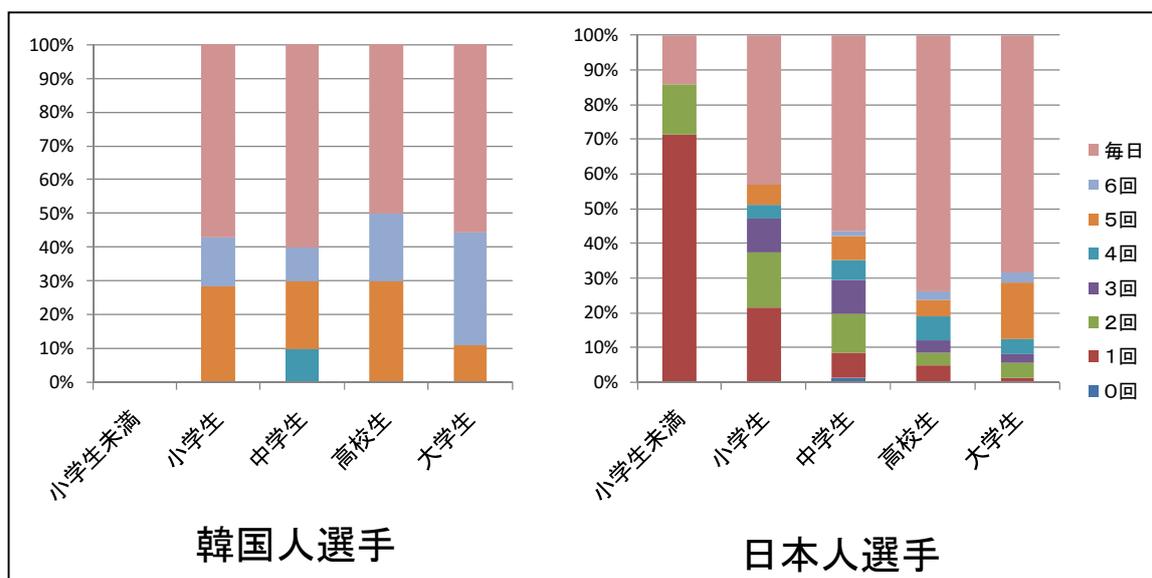


図 4-8 1週間あたりの練習日数

図 4-9 より、韓国人プロゴルファーの 1 日平均練習時間は、小学生の時から 2 時間以上 3 時間未満と 3 時間以上が約 90%を占めていることが明らかとなった。また、中学生以降は 80%前後の選手が 3 時間以上練習していることが明らかになった。

一方、日本人プロゴルファーは小学生未満から大学生になるにつれて、次第に練習時間が増えていくことが窺える。しかし、全ての期間で韓国人プロゴルファーのジュニア時代の練習時間よりも短いことがわかった。

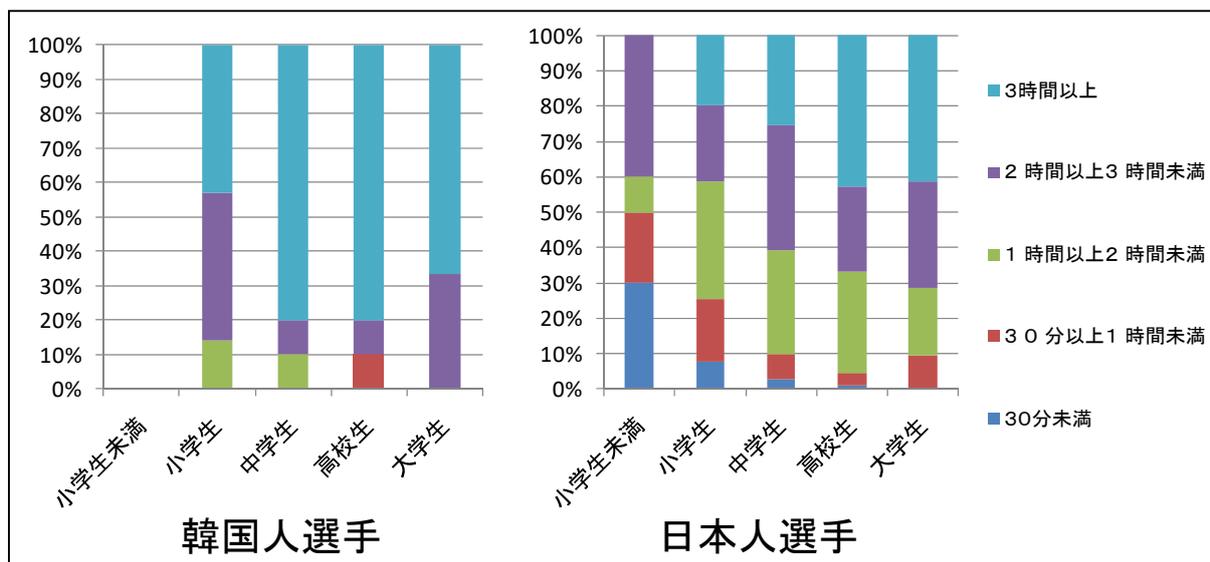


図 4-9 1日あたりの平均練習時間

図 4-10 より、練習 1 回あたりの平均球数は、韓国人プロゴルファーは小学生の時から 500 球以上練習した選手が約 30%いることがわかった。また、大学生に向かって練習球数が増えることが明らかになった。

一方、日本人プロゴルファーは小学生未満から高校生に向かって練習球数が増えていくことがわかった。また、大学生になると練習球数が高校生よりも減少することが明らかになった。

この 2 つのグラフを比べると、どの段階でも韓国人プロゴルファーの方が日本人プロゴルファーよりも練習球数が多い事がわかった。

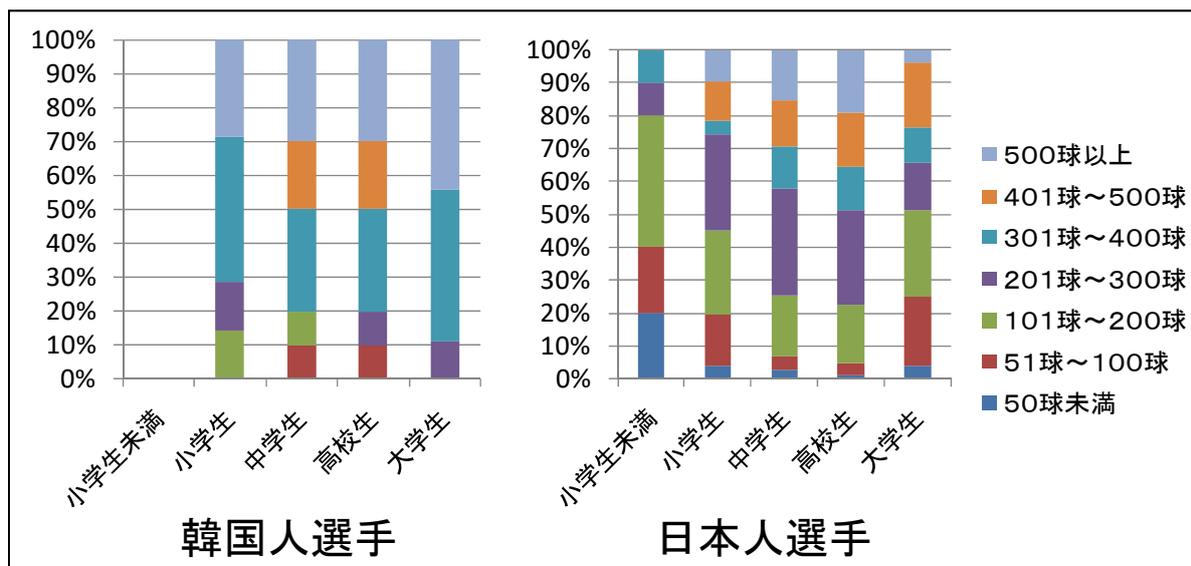


図 4-10 練習 1 回あたりの平均球数

図 4-11 より、韓国人プロゴルファーは、小学生の時から約 40%の選手が 1 カ月に 9 回以上ラウンドしている事がわかった。また、年齢が上がるにつれてラウンド数が増えていくことが明らかになった。

一方、日本人プロゴルファーは、小学生未満では約 60%がラウンドをしていなかったことがわかった。ただし、年齢と共にラウンド数が増えることが明らかになった。

これらの比較から、韓国人プロゴルファーは日本人プロゴルファーより全ての世代でラウンド数が多かった。

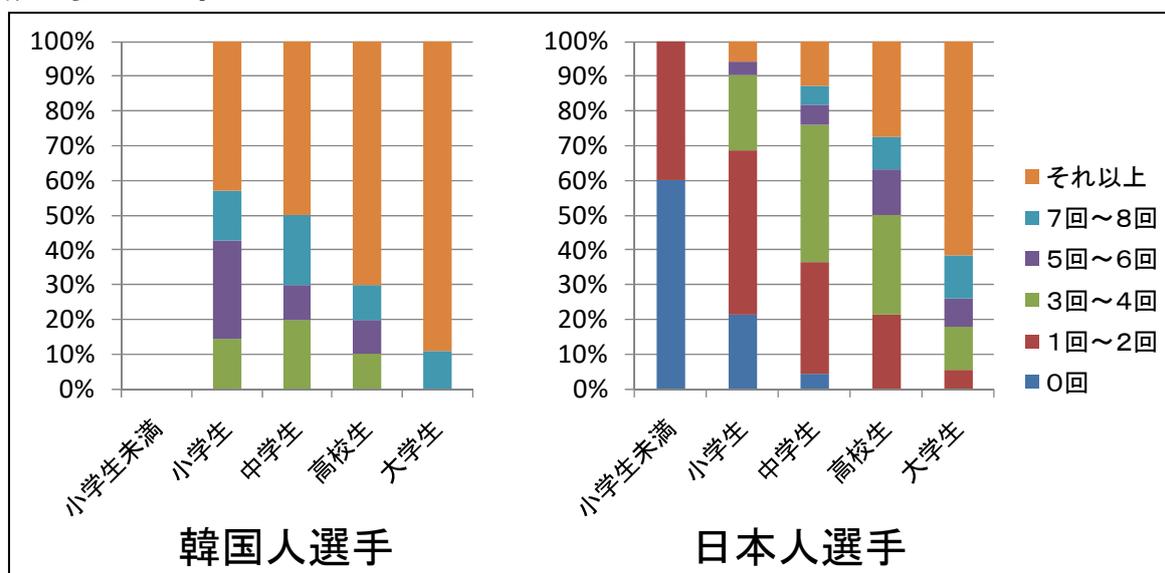


図 4-11 1ヶ月あたりの平均ラウンド数

図 4-12 より、韓国人プロゴルファーは、小学生の時から約 60%がプロゴルファーに指導を受けていたことが明らかになった。その後も 80%程度の選手が大学生になるまでプロゴルファーに指導を受けていたことがわかった

一方、日本人プロゴルファーの指導者は、小学生未満の段階で約 70%が親であることがわかった。小学生になると、親が指導者である場合は約 60%に減少するが、引き続き高い割合である事が窺える。日本人プロゴルファーが、指導者にプロゴルファーをつけたのは小学生時代であった事がわかった。またその割合は 20%程度であった。大学生に向かって指導者がプロゴルファーである場合は約 40%まで増えた事が明らかになった。それに連なって指導者が親である場合は約 20%に減少していた。

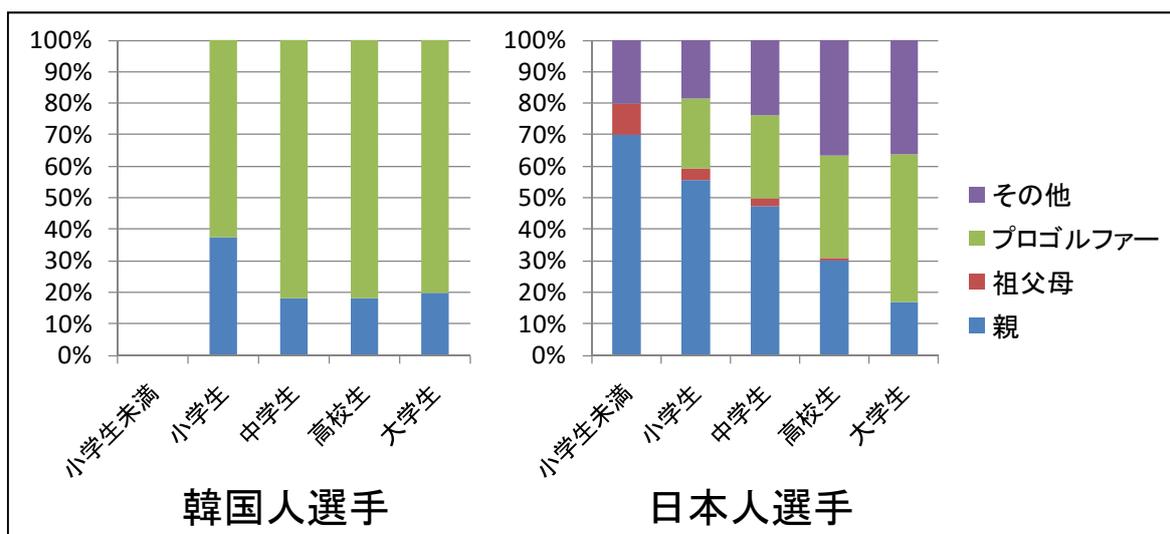


図 4-12 ジュニア時代の指導者

図 4-13 は、日韓プロゴルファーがジュニアゴルファーだった当時、練習を自主的に行っていたものか強制的にやらされたものかを明らかにした調査である。その結果、韓国人プロ選手は小学生の時、約 30%の選手が練習に対して「非常に自主的」であったことがわかった。また、小学生の時「非常に強制的」に練習させられたと回答した選手はいなかった。中学生になると「非常に自主的」は 20%程度に減少した。対して「非常に強制的」は約 10%いることがわかった。そして高校生になると「非常に自主的」は 30%程度に増え、「まあまあ自主的」が約 50%に増えたことで、約 80%の選手が自主的に練習していたことが明らかになった。大学生になると「非常に自主的」が約 80%と急激に増えることがわかった。

一方、日本人プロ選手は小学生未満から小学生時代にはほぼ同様の数字が出ており、「非常に自主的」が約 30%、「まあまあ自主的」が約 30%~40%、「どちらとも言えない」と答えた層が韓国人プロゴルファーに比べてかなり少なく、残りは「非常に強制的」から「まあまあ強制的」と答えた。

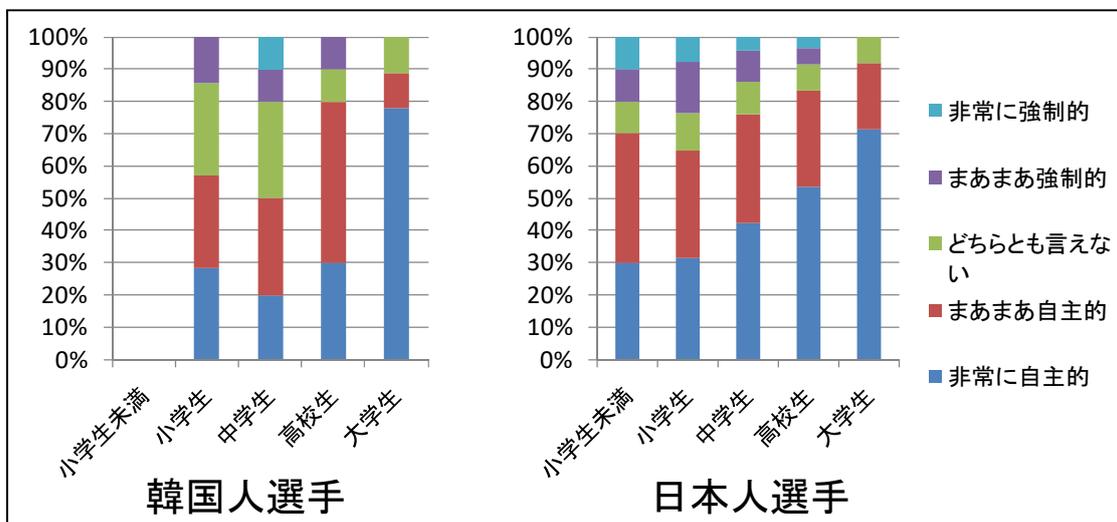


図 4-13 ジュニア時代の練習は自主的だったか

第5章 考察

本章では研究結果から得られた知見を整理し、韓国人プロゴルファーがどのようにして強くなったかを考察した。

韓国の現地調査とインタビュー調査及び日韓プロゴルファーのアンケート結果から、韓国のジュニア育成の強みと弱みという観点から表 5-1 にまとめた。これらを対比することで韓国がなぜ優秀な選手を輩出することができるかを考察していく。

表 5-1 韓国ゴルフの育成における強みと弱み

	韓国
強み	<ul style="list-style-type: none">・学校に行かずに練習するため練習時間が多い・親が子供のゴルフに金と時間を使う・コーチが最初からついている・小学生、中学生時の練習量が多い・試合が多い・ナショナルチームの強化合宿は年間 300 日・中高等学校ゴルフ連盟のスコア管理システムがある・指導がスパルタ式
弱み	<ul style="list-style-type: none">・ゴルフ場の数が少ない・ラウンド代が高い・練習代が高い・ジュニアゴルフ人口が少ない・2 年間の兵役がある・土日に安くプレーできるゴルフ場が無い

第1節 韓国ゴルフ強化の要因

韓国人プロゴルファーが世界で活躍する背景は4つ考えられる。協会のサポート、民間のサポート、指導者のサポート、最後に親のサポートである。これらの視点から、韓国人プロの世界的な活躍がみられるようになったことに関して考察を行う。

第1項 協会のサポート

現地調査とインタビュー調査の結果、韓国では協会がジュニアゴルファーに対して優秀になればなるほど優遇される仕組みを作っていることがわかった。それは、韓国ナショナルチームを中心とした特別優遇とスコア管理である。

ナショナルチームに選抜されて国際大会で活躍することは非常に重要な意味を持っている。特に男子にとってはアジア競技大会で優勝すると兵役免除になる。それ以外にも男女共通のメリットとして、2年間ナショナルチームメンバーから外れなければ韓国ツアーのシード権が与えられる。また、年間300日の強化合宿の費用を韓国ゴルフ協会が負担してくれる。このようなトップ選手に対しての優遇が、ナショナルチームのステータスを高め多くのジュニアゴルファーがナショナルチームに入りたいと思う要因になっていると考えられる。

このような動機で、ナショナルチームに選抜されるために多くのジュニアゴルファーがポイント対象の試合に出場している。それが「毎日」「長時間」「多くの球数」を練習するといった循環を生み出している。この仕組みが韓国ゴルフ界の競争力を高めていると思われる。

また、韓国中高等学校ゴルフ連盟では、2000年から連盟に所属する全てのジュニアゴルファーのスコア管理を行っている。このホームページには、18ホールの平均ストローク、平均パット数、平均パーオン率、リカバリー率のデータと順位が記載されている。仮に平均パットをクリックすると韓国内での順位が出てレベルが把握できるように工夫されているのだ。これを選手や親、コーチが見ることによって弱点がどこにあるのかを共有することができるため、練習の効率化のために非常に有益な情報である。

このように韓国のゴルフ協会は「韓国ツアーの2年間のシード権」「300日の強化合宿の費用負担」とアジア競技大会の金メダルに与えられる「兵役免除」を組み合わせることで、試合に出場する動機と毎日の練習のモチベーションを上げるための仕組みを作っている。また、中高高等学校ゴルフ連盟は練習課題を客観的に見つけられるデータの提供を行っている。この2つの軸が韓国ジュニアゴルファーのレベルを押し上げ強化に繋がっていると考えられる。

第2項 民間施設のサポート

本稿では、民間施設のサポートに関して考察を行う。

韓国でジュニアゴルファーが練習するためには、ゴルフアカデミーに在籍する必要があることがわかった。それは、韓国のゴルフ場はメンバーシップコースが多く、仮にパブリックゴルフ場であってもジュニアゴルファーを簡単に受け入れる環境が整備されていないからである。またゴルフ練習場もジュニア料金の設定が無いため、数多くのボールを打つジュニアゴルファーにとっては相当なコストになる。こういったジュニアゴルファーにとって厳しい要素を、ゴルフの指導と練習場との提携、ゴルフ場やショートコースとの提携をすることでコストダウンさせることがゴルフアカデミーの役割である。しかし、ゴルフアカデミー料金の相場は 250 万ウォンもするとコーチのチョイ・ミュンホがインタビュー取材で答えていた。通常料金で指導、ラウンド、練習をこなすとなると親にとっては、さらに大きな金銭的な負担になる。親がゴルフに払うコストはこれだけではなく、子供が試合に出場する為のコストはさらに大きい。出場試合数やプレー料金によっても料金は変化するがコーチのチョイ・ミュンホは「多くのジュニアは毎月 600 万ウォン程度掛かっている」と回答していた。

しかしながら、ゴルフアカデミーに所属しなければ練習ができない韓国では、ジュニアゴルファーにとって有益な状況を生みだしていると考えられる。それは「日韓プロゴルファーに対するアンケート調査」における、ジュニア時代の指導者についての質問で、韓国のプロゴルファーは日本のプロゴルファーに対して圧倒的多くの選手が早い段階からプロゴルファーに指導を受けることが明らかになった。これはジュニア育成に携わっている筆者の経験からも早期における正しいスイング作りはその後の成長に大きく影響を及ぼすことが分かっている。

韓国のジュニア育成は、民間のゴルフアカデミーのサポート体制があって機能していると考えられる。

第3項 指導者のサポート

韓国のジュニア育成で指導者のサポートは重要であると考えられる。コーチのチョイ・ミュンホはアンケート調査の中で「韓国のジュニア育成はスパルタスタイルが一般的である」と述べた。指導者は練習量やテーマを決めて子供の成長を厳しく指導していくのである。

このように子供のゴルフに全てを費やして育成してくため、練習に関して子供の自主性を重んじるといったことは一切ない。自我が発達していない小学生未満や小学生の段階では練習に自分一人で厳しく取り組める選手は一握りである。通常、多くの子供が遊びたい盛りにゴルフを「毎日」「長時間」練習するのは自分の意志では不可能といってよい。しかし運動神経や運動能力を発達させて早い段階にスイングの基礎や多くのショットバリエーションを覚えるためには強制的にでも練習させる必要がある。韓国においてはジュニア時代のこうしたスタイルが、育成の根幹を支えていると考えられる。また、コーチのチョイ・ミュンホ

がインタビューの中で「練習場で真っすぐ打てない段階でコースに出る必要が無い」と述べていたことや、キム・ヒョンソンがラウンドをする環境が無かったため練習場でボールを打ってスイング作りをするしかなかったと答えていることから早期のスイング作りが行われていることが窺える。

しかし、日韓プロゴルファーに対するアンケート調査の中で、ジュニア時代の練習が自主的であったか強制的であったかの質問では日韓で同様の結果を得た。このことから厳しく指導を受けた子供でも、強制的にやらされた感覚を持っていないことが窺える。またジュニア時代にゴルフが好きであったかどうかのアンケートに対しても、日本より多い 93%の選手が大好きもしくは好きと回答した。このように「スパルタスタイル」で育成された選手でもゴルフを嫌いになったり、強制的にやらされたりしたイメージを持っていないことがわかった。

第4項 親のサポート

本項では、親のサポートに関しての考察を行う。

親は子供のゴルフ育成に対して多額な金銭的な負担だけではなく、時間的な負担も負っていることがわかった。韓国の現地調査の結果、多くの親は朝から晩まで練習する子供の送迎をしていた。そして、ほとんどの親が子供に付ききりで練習のサポートをしたり、近くで待機したりしていた。

インタビュー調査からも子供にゴルフをさせている親の多くは金銭的に余裕のある家庭であることがわかったが、中には借金をしてまで子供に懸ける親もいるそうである。

このように子供に金と時間を費やして期待をかける韓国では、子供にどのようなゴルフ環境を与えるかが重要である。そのため家族ごと環境の良いソクチョや済州島に移住するケースも少なくない。また韓国国内で子供にゴルフをやらせようと思った場合、かなりのコストが掛かることからアメリカやニュージーランド、オーストラリアといったゴルフ環境の良い国に家族ごと移住するケースも多くみられる。

以上から、韓国では親が子供の練習環境をプロデュースし、送迎や練習のサポートなどマネージャー的な役割を果たしていることがわかった。このような子供に対してのサポートが「毎日」「長時間」練習を可能にしていると考えられる。これが韓国のジュニアゴルファーのレベルアップに非常な大きな役割を果たしていると考えられる。

第2節 日韓プロゴルファーのジュニア時代の比較

日韓プロゴルファーに対するアンケート結果から日韓プロゴルファーのジュニア時代における相違点がわかった。韓国と日本が圧倒的に違うのは練習量である。韓国人プロゴルファーは、ゴルフを始めてすぐにほとんどの選手が「毎日」「長時間」「多くの球数」を練習していたが、日本人プロゴルファーは1週間で練習場に行く回数や1回の練習球数が少ない事から、初めは遊びで始めている場合が多いことが考えられる。これは将来の夢の質問に対しても韓国人プロゴルファーは82%が「プロゴルファー」と回答しているのに対して日本人プロゴルファーは55%しか「プロゴルファー」になりたいと思っていなかったことから窺える。ジュニア時代から目標を明確に持つことはゴルフ強化に非常に大きな意味を持っていると考えられる。

ジュニア時代の指導者に関する質問は日韓で大きな差が出た。韓国ではゴルフを始めてすぐに多くの選手がプロゴルファーの指導を受けたことがわかった。しかし、日本では遊びでゴルフをスタートさせる場合が多いため親や祖父母が指導者である場合が多い。もちろん日本も幼少期から年齢が上がるにつれて、指導者がプロゴルファーになる割合が増えてはいるが韓国には遠く及ばない。日本ゴルフツアーでプロゴルファーのコーチングを行っている筆者の経験からスイングは早い年齢で修得させる事が重要であると思われる。それはゴルフを始めてから自由に打つ時間が長ければ長いほどスイングも個性的になる可能性が高いからである。それを修正する年齢が遅くなればそれだけスイングを変えるリスクも増すことになる。このようなことから韓国の早期指導は合理的であるといえる。

第3節 日本におけるジュニア育成環境の現状と課題

韓国のジュニア育成の強みと弱みという観点からまとめたものが表 5-2 である。

表 5-2 日本ゴルフの育成における強みと弱み

	日本
強み	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴルフ場が多い ・ゴルフ練習場が多い ・ラウンド代が安い(地方) ・練習代が安い(地方) ・ジュニアゴルフ人口が多い(首都圏) ・試合が多い ・兵役が無い ・土日でもジュニア料金でプレーできるゴルフ場がある ・小学生未満の低年齢からゴルフを始める
弱み	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に通学しながら練習するため平日の練習時間が少ない ・多くの場合最初の指導者は親 ・小学生時の練習量が少ない ・ナショナルチームの強化合宿は年間 20 日程度 ・ジュニアのスコア管理システムが無い ・ラウンド代が高い(首都圏) ・練習代が高い(首都圏) ・ジュニアゴルフ人口が少ない(地方)

第1項 日本人ゴルファー強化のための協会の役割

日本が韓国のように選手を強化するためには、日本ナショナルチーム強化が必須である。韓国のキム・キョンテやノ・スンヨル、シン・ジエといったトップ選手は、韓国ナショナルチームの出身者である。このことから、日本ナショナルチームの果たすべき役割は少なくないといえる。2010年度、日本ナショナルチームの活動をまとめたものが表 5-3 である。

表 5-3 日本ナショナルチームの活動一覧

日本ナショナルチーム	男子	女子
選考方法	ポイント制+選考会	ポイント制+選考会
代表選手	10人	9人
育成選手	1人	2人
体力測定合宿	年3回(合計9日)	年3回(合計9日)
強化合宿	年2回(合計10日)	年2回(合計10日)
公式国際競技日本代表事前合宿	選出メンバーのみ	選出メンバーのみ
ナショナルチーム選考合宿	12月に1回	12月に1回
トレーニングカリキュラムの提供	○	○
スコア管理システムによる 各選手のデータ提供	○	○
派遣対象公式国際競技	7試合	6試合

日本ゴルフ協会の内田愛次郎へのインタビュー調査の結果、日本ナショナルチームの低迷の原因が体力にあると考えていることがわかった。したがって、2010年度の活動に関しては体力強化に時間を費やしている。グアムで行った6日間の強化合宿も午前中にトレーニングを取り入れ、午後にラウンド、そして夜にミーティングというスケジュールだった。このトレーニングメインの練習カリキュラムを作った根拠は、体力測定の結果、日本選手の体力は世界のトップ選手に比べてかなり劣っていることがわかったからである。

また、日本ナショナルチームではスコア管理システムでナショナルチームメンバーのデータ管理を行っている。これによって自分の弱点を発見して練習の効率化を図っている。

次に、図 5-1 は日本ナショナルチーム選考方法をまとめたものである。選考方法は韓国に比べてポイント対象試合が少なく、仮に力がある選手がこれら試合で上位に入れなかった場合は選考から漏れる恐れがあると考えられる。

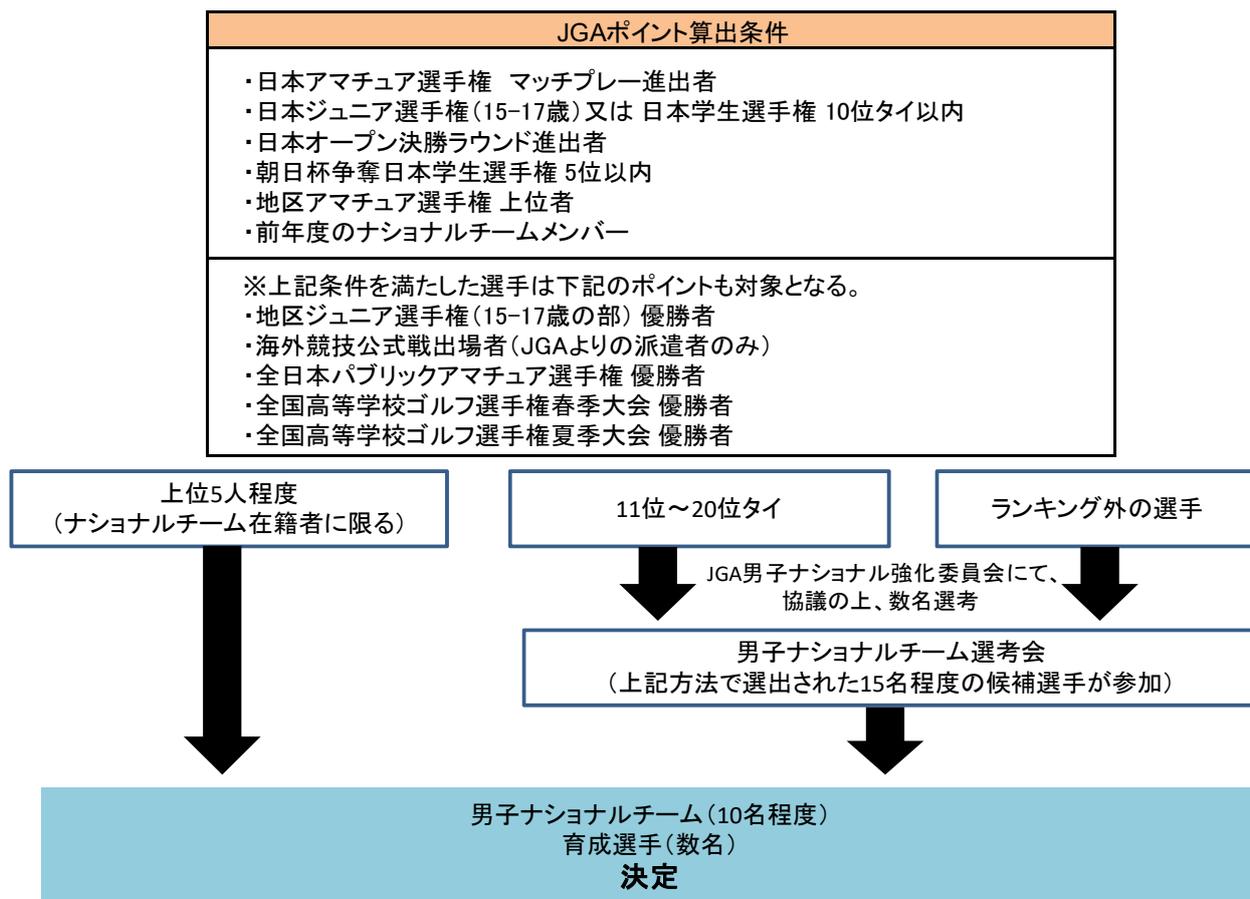


図 5-1 日本ナショナルチームの選考方法

これら日本ナショナルチームの強化方法や選考方法を把握したうえで、韓国ナショナルチームとの対比を行うと表 5-4 のようになる。

表 5-4 日韓のナショナルチームの比較

	韓国ナショナルチーム	日本ナショナルチーム
代表選手	男女各 6 人	男子 10 人、女子 9 人
育成選手	男女各 31 人	男子 1 人、女子 2 人
年間合宿日数	300 日	19 日
選抜方法	ポイントシステム	ポイントシステム+選考
メリット①	合宿&代表試合の費用負担	合宿&代表試合の費用負担
メリット②	2年間代表選手を守ると 韓国ツアーのシード権がもらえる	
メリット③	アジア競技大会の金メダル、 もしくはオリンピックの3位以内で 兵役免除	

代表選手は韓国が男女各 6 人に対して日本は男子 10 人、女子 9 人と比較的多い事がわかった。しかし、育成選手は韓国が、各世代において人数を決めて男女各 31 人選出するのに対して、日本は男子 1 人、女子 2 人と非常に少ない。代表と育成の関係は、韓国はピラミッドモデル、日本は逆ピラミッドモデルといえる。さらに、韓国はポイント対象試合の結果次第でその度に、代表選手と育成選手の入れ替えがある。一方、日本は、代表と育成の入れ替わりは無い。このことから韓国人アマチュアの方が試合に対してもモチベーションが高いといえるだろう。日本も韓国のように各世代から育成選手を選抜して代表選手を流動的にすることで、選手の練習や試合に対してのモチベーションを高めることができると考えられる。

年間合宿日数は韓国が 300 日、日本が 19 日と大きな開きがある。これが国際大会での日本と韓国の試合結果に影響していると考えられる。しかし、日本ナショナルチームが韓国ナショナルチームのように 300 日の合宿を行うことは非常に難しい。このような強化合宿の日数の差を少しでも減らすためには、ナショナルチーム強化費の捻出と学校との日程調整が課題となる。この 2 つをクリアにすることで長期合宿が可能となる。これが日本代表の強化に繋がると考えられる。

ナショナルチームメンバーの選考方法も日本と韓国では違いがある。韓国は多くのポイント対象試合がありポイントを稼ぐことで代表選手もしくは育成選手に選抜される。そのため優秀な選手の選考漏れが少ないと考えられる。一方、日本はポイント対象試合が少ないために優秀な選手の選考漏れが考えられる。これらのことをなくすための施策としてナショナルチームの選考基準に平均ストロークによる選抜を設けるべきである。プロのトーナメントにおいて賞金ランキングに最も相関している部門別データは平均ストロークである。したがって優秀な選手を正しく選抜する為には平均ストロークによる選出枠を設けるべきである。

しかし、これには 2 点問題がある。それは正しく選抜するためにはかなりのラウンド数が必要であること、もう 1 点はコースの難度が違う為に精度を欠く可能性があることである。しかし現行の方法にプラスすることで優秀な選手の選考漏れを抑える効果が期待できる。

韓国ナショナルチームと日本ナショナルチームの最も大きな違いは、代表選手になるメリットにあると考えられる。韓国では、合宿と代表試合の費用負担はもちろん、2 年間代表選手から一度も外れないと韓国ツアーのシード権が与えられる。確かに、試合ごとのポイントによって入れ替えがある韓国では 2 年間代表から外れないことは至難の業ではある。しかし、それがモチベーションになって日々の練習に取り組めることに意味があると考えられる。また、男子選手にとっては 2 年間の兵役免除が何よりのモチベーションとなっている。一方、日本は合宿と代表試合の費用負担はあるが、それ以外に韓国の代表選手ほどのメリットが存在しない。

日本ナショナルチームの強化は結果的に日本から世界に通用する選手の育成に直結する。そのためにも日本代表の強化は必須である。選手のモチベーションを上げるためには、韓国のように 2 年間代表選手で居続ければツアーのシード権を与えるとといった特権を与えることが考えられる。しかし、日本ツアーにおいてこれはかなり難しいことである。それは、ツアー予選会のアマチュア出場特別枠は日本アマチュアゴルフ選手権と日本学生選手権の優

勝者が2次予選から出場できるということのみであるためである。よって現実的には、シード権がなくても、国際大会で優勝すれば JGTO や JLPGA と連携してツアー最終予選会から出場できる権利でも十分に効果が期待できる。

次に日本における韓国中高等学校ゴルフ連盟が作っているような、スコア管理システムの構築は日本のジュニアゴルファーの練習効率を現状よりもはるかに上げる効果を期待できる。現在日本では、韓国中高等学校ゴルフ連盟のように、全国レベルで自分のデータを他の選手と対比できるようなスコア管理システムは存在しない。

日本のジュニアゴルファーの練習時間を考慮すると、平日に韓国のジュニアゴルファーと同じ練習量やラウンド数を確保することは難しい。よって、練習効率を上げることが最も重要となる。練習効率を上げるためには、韓国中高等学校ゴルフ連盟のスコア管理システムと同等もしくはそれ以上のデータを日本のジュニアゴルファーに提供することが必要であると筆者は考える。これによって、日本のジュニアゴルファーの練習の効率化を図ることができると同時に、競争意識を高める効果も期待できる。また、親やコーチがこのデータを見ることによって選手の問題点を皆の共通認識として持つことができるため、明確な指導方針が得られるという効果もあるだろう。

また、世界に通用する選手を育てるためには、同世代との対比だけでは不十分であり、自らの現在のレベルをツアーで活躍するトッププロゴルファーと対比することも重要であると考えられる。

第2項 日本人ゴルファー強化のための民間の役割

日本が韓国のようにゴルファーを強化するためには、ゴルフ環境の改善が必要となる。それを考える上で日本の国内におけるジュニアゴルフ環境を首都圏型と地方型に大別して施策を考える必要があるだろう。

日本が韓国ゴルフ界のように優秀な選手を輩出するためには、ゴルフ場と練習場の協力が不可欠である。現在でも日本のゴルフ場と練習場は、韓国に比べてジュニア料金の設定などがされている施設が少なくない。しかし、このような設定がされている施設は地方が多く、ジュニア人口が多い首都圏には少ない。平日、学校に通学している日本のジュニアゴルファーにとって、学校や家の近くにジュニア料金の設定のあるゴルフ場や練習場があれば、韓国のジュニアゴルファーに練習量やラウンド数でも対抗することができるだろう。

図 5-2 は 2009 の都道府県別の小学生から高校生までの日本ゴルフ協会に登録しているジュニア人口である。2010 年の韓国中高等学校ゴルフ連盟ジュニア登録人数が 2277 人であり、東京のジュニアゴルファーとほぼ同じ数である。このことから、首都圏のゴルフ環境の改善によって、優秀なゴルファーの育成に繋がることが期待できる。

ただし、図 5-3 からわかるとおり、東京のゴルフ場の数は 21 コースしかなく、土日や平日の夕方にジュニア料金でラウンドできるゴルフ場はほとんどない。また、土日はゴルフ場が混雑しているために受け入れができないゴルフ場が多い。国を挙げてゴルフ普及やジ

ジュニア育成を考えるのであれば、各ゴルフ場に土日の来場者の内、数%のジュニアゴルファーの受け入れを促すといった施策を打ち出す必要がある。もちろん、一般ゴルファーとの住み分けも重要であるため、早朝と薄暮のプレーに限定したものでも構わないだろう。

東京都内の練習場に関しては65個の施設がある。しかし、練習場が混雑する時間帯とジュニアゴルファーの練習時間帯が重なるため、ジュニア料金を設定している練習場は少ない。世界に通用するゴルファーを数多く輩出するためには首都圏などのジュニアゴルファー人口の多いエリアの環境改善が必要になる。

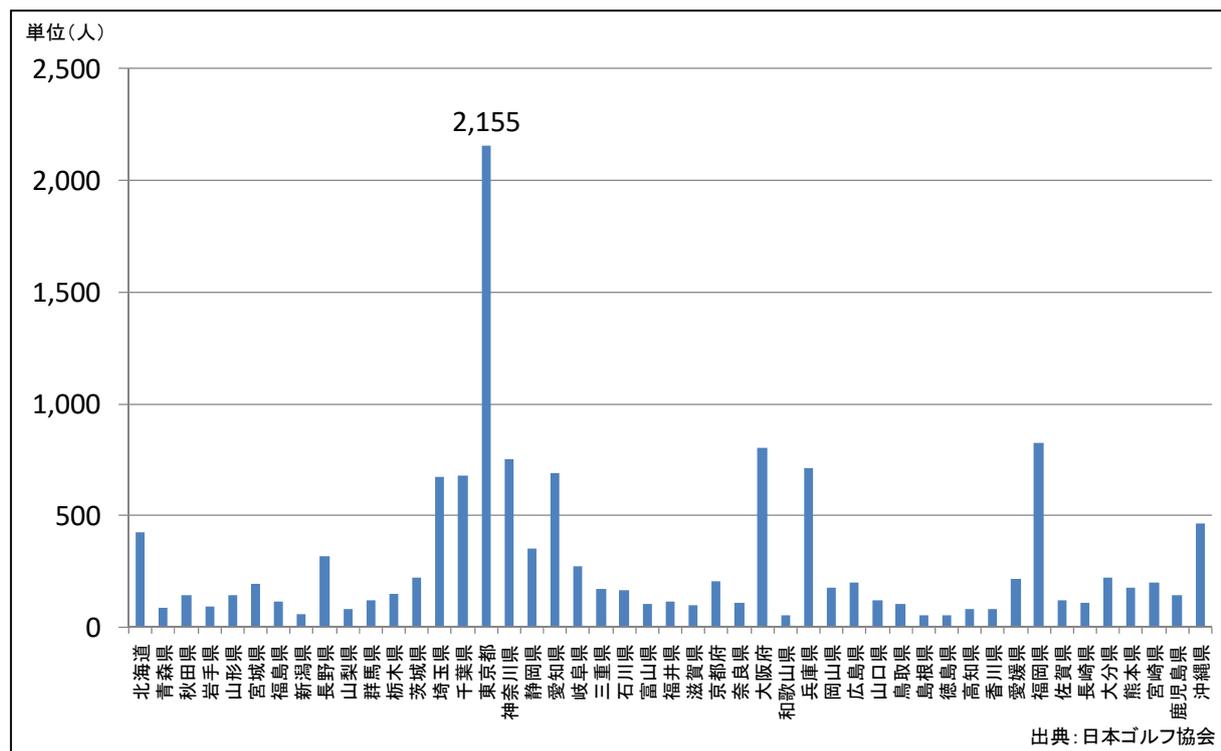


図 5-2 2009年都道府県別ジュニア人口

表 5-5 坂田塾の練習スタイル

坂田塾	
入塾の年齢	小学 4 年生以上
ゴルフに掛かる全ての料金	無料
1 週間に何回練習回数	毎日
1 日の練習時間	500 球打ち終わるまで
1 回の練習で何球	500 球
ラウンド量	毎週末と長期休暇中毎日
塾の指導者	坂田信弘もしくはコーチ
練習は自主的または強制的だったか？	強制的

表 5-5 に示したとおり、「坂田塾」では、「毎日」「長時間」「多くの球数」の練習が行われている。本研究におけるアンケート調査の結果では、日本人選手の小学生時代の練習における球数は 100 球～300 球程度がほとんどであった。それと比較すると、「坂田塾」は、一般的な日本の練習環境よりも練習量が多いといえる。

熊本の「坂田塾」には通算 82 名が在籍して、男子 6 名、女子 13 名の 19 名がプロテストに合格しているが、その中には日本女子ツアー 2007 年賞金女王の上田桃子や 2008 年賞金女王の古閑美保などが含まれている。このように優秀な選手を「坂田塾」が輩出している背景には、練習量に関係しているのではないかと考えられる。確かに、練習量が多いことが優秀な選手を輩出する直接的な要因であると言い切ることはできない。しかし、韓国においても、練習量が多く、優秀な選手が多く輩出されていた。韓国と「坂田塾」においては、幼少期から「毎日」「長時間」「多くの球数」をこなしていることが共通しており、どちらも優秀な選手を輩出している。したがって、優秀な選手の輩出には幼少期から適切な練習量をこなすことが求められるのではないかという示唆を得ることができるだろう。一方、韓国と坂田塾の相違点も 2 つあると考えられる。1 つ目は親の立場である。韓国では親が子供に積極的に関与していく。一方、坂田塾では入塾の際に指導に関する親の関与を一切禁止している。2 つ目の違いは、韓国のジュニア育成には、親に練習の費用負担が強いられるのに対し、坂田塾では指導料、練習場で掛かるボール代、ラウンド料金がすべて無料であることである。小学生の子供たちが自主的に「毎日」「長時間」「多くの球数」をこなすことは非常に難しい。ただ単に練習するだけでなく指導者が適切な指摘を行い、しかも厳しく指導することで練習の質が高まると考えられる。このような指導体制から優秀な選手が数多く排出されると考えられる。しかし、気をつけなければいけない点は、厳しい指導と体罰を勘違いしてはいけないということである。

第4項 日本人ゴルファー強化のための親の役割

韓国の親は子供のゴルフ育成に対して多額な金銭的な負担だけではなく、時間的な負担も負っていることがわかった。ジュニア育成の現場に立っている筆者の経験から日本の親は韓国と比べると軽負担だと考えられる。しかし、ゴルフは通常の習いごとの費用に比べると相当な金と練習や試合の送迎などの時間的な拘束が強いられる。特に小学生未満や小学生の段階でゴルフを始めると1人でゴルフ練習場に行くことすら難しい。したがって、低年齢でゴルフをおこなう場合には親のサポートが無い限り不可能なのである。

また、指導者と親が協力することでより効率的な練習ができると考えられる。それは親が子供のゴルフレッスンについてくる場合、レッスン風景をビデオで撮影し復習することで、練習の質を高めることができると考察できる。このように、子供、親、指導者が三位一体になることが重要である。

また近年、日本ジュニアゴルフ界においてマナーや不正に関することが問題になっている。このような問題を解決するためにも、親がモラルやマナー、そしてルールを順守することを子供に説く必要がある。そうした教育が人間としても魅力のある選手を育てるために重要である。

第4節 考察のまとめ

韓国では「協会」「民間」「指導者」「親」がそれぞれ強化の仕組みや強い意識を持っていることが分かった。しかし日本においては、それに比べると改善点が多いと考えられる。日本の「協会」「民間」「指導者」「親」が上記の考察で述べた事を取り入れることによって韓国以上の強化及び育成が可能であると考察できる。

第6章 結論

本研究は、近年韓国人プロゴルファーが世界で活躍している中で、その強さの理由を明らかにしたものである。

第1章では研究背景と研究目的を述べた。近年、世界における韓国人プロゴルファーの活躍は著しく、男女ともに多くの韓国人プロゴルファーが1998年以降のメジャーチャンピオンになっている。また、シード選手数も、日本のJGTO・JLPGAやアメリカのUSPGAで近年その数を伸ばしており、ジュニアにおいても日本よりも好成績を残している。

しかし、韓国のジュニア人口は日本よりも少なく、ゴルフ環境も決して良いとはいえない。そこで本研究では、韓国のプロゴルファーが強くなった理由を明らかにすることを目的とした。

第2章は研究手法である。本研究では、上記の研究目的を達成するために、韓国現地調査とインタビュー調査、日韓プロゴルファーに対するアンケート調査の2つの手法を用いた。

第3章では、韓国現地調査とインタビュー調査の結果を整理した。

韓国の練習環境は、親の金銭的及び送迎などによる時間的負担が非常に大きい事がわかった。また、ほとんどのジュニアゴルファーが学校には通わず「毎日」「長時間」「多くの球数」を練習していたことが明らかになった。このような厳しい練習を行うのは、「2年間ナショナルチームに所属し続けると韓国ツアーのシード権を取得できる」ことや、「300日のナショナルチーム強化合宿への参加」が理由である。また、男子にとっては韓国ナショナルチームに選抜されアジア競技大会で金メダルを取り「兵役免除」になることが理由の一つでもある。

次に韓国の指導方法は強制的にやらせるスパルタ式が一般的であることがわかった。最後に韓国中高等学校ゴルフ連盟はジュニアゴルファーのスコアデータをホームページで公開することで選手や親またはコーチが弱点を考えながら練習できる情報を提供していることが明らかになった。

第4章では、日韓プロゴルファーに対するアンケート調査の結果を整理した。韓国人プロゴルファーの方が日本人プロゴルファーよりもジュニア時代に練習量やラウンド数が多かったことが明らかになった。また多くの韓国人プロは幼少期からプロゴルファーの指導を受けていたことがわかった。

第5章では、これまでの研究結果を基に、韓国人プロゴルファーが強くなった理由を考察するとともに、それを踏まえて日本ゴルフ界が取り組むべきテーマを考察した。

韓国のゴルフ協会のサポートとして、「韓国ツアーでの2年間のシード権」「300日の強化合宿の費用負担」、そしてアジア競技大会の金メダルに与えられる「兵役免除」を組み合わせることで、試合に出場する動機と毎日の練習のモチベーションを上げるための仕組みを作っている。また、中高高等学校ゴルフ連盟は、練習課題を客観的に見つけられるデータの提供を行っている。この2つが軸となり、韓国ジュニアゴルファーのレベルを押し上げ選手の育成および強化に繋がっているという考えに至った。

また、韓国ではゴルフ場や練習場の料金が高いために、個人ではゴルフ環境を整えることが難しく、ほとんどのジュニアゴルファーは練習環境を整えるために民間施設のゴルフアカデミーに所属している。そのシステムは結果的に、韓国のジュニアゴルファーが幼少期からプロゴルファーの指導を受ける環境を生み出しているといえる。

さらに、指導面においてはスパルタ式が一般的であることがわかった。このことが、幼少期の「毎日」「長時間」「多くの球数」を打つという状況を生み出し、韓国人プロゴルファーの世界的活躍の背景になっていると考えられる。

また、親は子供のゴルフ育成に対して多額な金銭的な負担だけではなく、時間的な負担も負っていることがわかった。韓国の現地調査の結果、多くの親は朝から晩まで練習する子供の送迎をしていた。そして、ほとんどの親が子供に付ききりで練習のサポートをしたり、近くで待機したりしていた。

日韓プロゴルファーのアンケート調査からも、幼少期に「毎日」「長時間」「多くの球数」を練習し、プロゴルファーに指導を受けることが強化に繋がっているという示唆を得た。これらを踏まえて、日本ゴルフ界が取り組むべき強化策は4点挙げられる。1つ目はナショナルチームを中心とした強化体制の整備である。2つ目は、スコア管理システムの構築により練習効率を上げることである。そして3つ目は、ゴルフ環境の整備である。首都圏では、ゴルフ場や練習場がジュニアゴルファーにとって練習しやすい場になるよう環境づくりを行う必要がある。また地方では、ジュニアゴルフ人口の増加が必要であるという考えに至った。最後に幼少期での適切な練習量の確保と専門的なコーチによる基礎的な指導である。

ゴルフ界の発展のために、本研究が少しでも貢献できれば幸いである。

謝辞

本研究を行うにあたり、非常に多くの方々の協力やお力添えのおかげで完成させることができました。関わってくださった全ての方々に感謝の意を申し上げたいと思います。

執筆の際、指導教員である平田竹男教授には、本稿に対する助言はもちろんのこと、構想段階から研究、そして執筆方法と実に様々な面に至る部分まで親切丁寧にご指導頂き、研究活動を支えて頂きました。平田教授のご指導が無ければ、プロゴルファーのコーチやジュニアゴルファーの育成活動、及びゴルフアカデミー代表としての活動と大学院生を同時に行うことは無理だったと思います。教授のご指導に心より感謝の意を申し上げます。同様に、違った視点から貴重な助言や示唆をいただいた副査の中村好男教授、村岡功教授にも深く感謝申し上げます。

そして、平田研究室同期の岩谷氏、岡本氏、佐藤氏、新戸氏、杉山氏、角原氏、豊池氏、中川氏、長久保氏、藤原氏、水島氏、森重氏、安福氏にもいろいろ協力していただきました。同期の皆さんにも心より感謝しています。また修士2年制の本多氏、畔蒜氏、兼清氏、佐藤氏、鈴木氏、間仁田氏にも多くの協力をいただきました。大変感謝しています。

また、筆者が大学院で学ぶことを応援してくれたトゥルーゴルフアカデミーの仲間達、そして、トーナメントの練習ラウンド中にも関わらずアンケートに快く協力してくださったプロゴルファーの皆様にも心より感謝しております。

そして、韓国の現地調査でジュニア育成の拠点を一緒に取材し通訳してくださったパク・ユチャン氏と小林走氏、韓国のジュニア育成事情のインタビュー調査に協力してくださったトップコーチのチョイ・ミュンホ氏、貴重な練習時間を割いてインタビューに応じていただいたノ・スンヨル氏とキム・ヒョンソン氏、また協会の目的、強化方法や運営方法についてのインタビューをさせていただいた韓国中高等学校ゴルフ連盟のマネージングディレクターであるキム・スンキュ氏にも心より感謝しております。

また、いろいろな相談にのってくださった日本ゴルフ協会理事の戸張捷氏、ジュニア人口の推移などのデータを提供していただきました同協会理事の塩田良氏、同じく日韓のナショナルチームについてお話しいただいた同協会主事の内田愛次郎氏、日本高等学校ゴルフ連盟についてのインタビューに協力していただいた同協会理事長の石田克人氏にも心より感謝しております。

そして、沖縄の現地調査でお世話になった菰野利明氏、同じく沖縄でのインタビュー取材に協力してくださった宮里優氏と、熊本での取材に協力してくださった山口恭廣氏と吉崎千晃氏にも心より感謝しています。

最後に韓国の文献を翻訳していただいた渡辺明子氏とキム・テキュン氏、選手へのインタビューの仲介をしていただいた徳山隆氏にも心より感謝しております。

それから、本文中に登場する先輩諸氏をはじめとする方々の敬称を省略させていただいた非礼をお詫びさせていただきます。

それでは、関係して下さったすべての方々の今後のご健康とご発展を祈念して、本稿を締めくくらせていただきます。

参考文献

- 中村剛, 田光子, 韓允洙 (2006) 「韓国におけるジュニア体操選手の育成システムに関する研究」, 浅井学園大学短期大学部研究紀要, 第 44 号
- 片山健二, 八代勉 (2006) 「ゴルフ練習場及びゴルフ場の社会的責任・役割と経営戦略」
- 黒須充 (1987) 「民間テニスクラブにおけるジュニア育成に関する育成」, 長崎大学教養部紀要, 人文科学篇, p.61-77
- 北村優明, 小島一夫 (2009) 「ジュニア育成選手に関する実践研究—バドミントン競技のジュニア選手を対象として—」, 北翔大学生涯学習研究紀要「生涯学習研究と実践」, 第 12 号
- 松原英輝, 入口豊, 中野尊志, 西田裕之, 中村泰介 (2006) 「フランスの青少年サッカー選手育成システムに関する研究(I)—若年層における選手育成システムの現状と特徴」, 大阪教育大学紀要. IV, 教育科学 55(1), 51-70
- 伊藤宏, 岸栄二, 有川秀之, 岡野進, 竹田憲司 (1989) 「英国のジュニア選手の育成と選手発掘について」, スプリント研究. 9, p. 47-56
- 韓国レジャー白書 2010
- 日本ゴルフ協会 HP (<http://www.jga.or.jp/jga/jsp/index.html>)
- 日本高等学校ゴルフ連盟 HP (http://kougoren.web.infoseek.co.jp/kougoren_index.html)
- 日本ゴルフツアー機構 HP (<http://www.jgto.org/>)
- 日本女子プロゴルフ協会 HP (<http://www.lpga.or.jp/>)
- 韓国ゴルフ協会 HP (<http://www.kgagolf.or.kr/>)
- 韓国中高等学校ゴルフ連盟 HP (<http://kjga.or.kr/>)
- USPGA HP (<http://www.pgatour.com/>)
- USLPGA HP (http://www.lpga.com/default_new.aspx)
- ゴルフダイジェストオンライン HP (<http://www.golfdigest.co.jp/>)
- 大韓体育会 HP (<http://www.sports.or.kr/intro/2010/intro.html>)

付録:日韓プロゴルファーアンケート調査用紙

1, いつからゴルフを始めましたか。

1. 小学生未満 2. 小学生 3. 中学生 4. 高校生 5. 大学生 6. それ以外

2, ゴルフを始めた理由は何ですか

1. 親の勧め 2. 兄弟がやっていたから 3. 友達がやっていたから
4. 憧れのプロの影響 5. それ以外 ()

3, ゴルフ以外の習いごとはありましたか。(複数回答可)

1. 野球 2. サッカー 3. 学習塾 4. ピアノ 5. 水泳
6. それ以外 ()

4, 将来の夢は何でしたか

1. プロゴルファー 2. プロゴルファー以外のスポーツ選手 ()
3.サラリーマン 4. 公務員 5. それ以外 ()

5, ゴルフは好きでしたか

1. 大好き 2. 好き 3. 普通 4. 嫌い 5. 大嫌い

6, 小学生未満の時、1週間に平均何回練習場に行きましたか。

1. 0回 2. 1回 3. 2回 4. 3回
5. 4回 6. 5回 7. 6回 8. 毎日

12, 小学生の時、1週間に平均何回練習場に行きましたか。

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 1. 0回 | 2. 1回 | 3. 2回 | 4. 3回 |
| 5. 4回 | 6. 5回 | 7. 6回 | 8. 毎日 |

13, 小学生の時、平均練習時間はどれくらいでしたか。

1. 練習する

- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1-1. 30分未満 | 1-2. 30分以上1時間未満 | 1-3. 1時間以上2時間未満 |
| 1-4. 2時間以上3時間未満 | 1-5. 3時間以上 () | |

2. 練習しない

14, 小学生の時、練習場では平均何球練習しましたか。(平均)

- | | | | |
|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1. 0球～50球 | 2. 51球～100球 | 3. 101球～200球 | 4. 201球～300球 |
| 5. 301球～400球 | 6. 401球～500球 | 7. 501球以上 | |

15, 小学生の時、1カ月に平均何回ラウンドに行きましたか。(1年のラウンドを12カ月に割ってください)

- | | | | |
|----------|-------------|----------|----------|
| 1. 0回 | 2. 1回～2回 | 3. 3回～4回 | 4. 5回～6回 |
| 5. 7回～8回 | 6. それ以上 () | | |

16, 小学生の時、ゴルフの指導者は誰でしたか。(複数回答あり)

- | | | | |
|------|--------|------------|---------|
| 1. 親 | 2. 祖父母 | 3. プロゴルファー | 4. それ以外 |
|------|--------|------------|---------|

17, 小学生の時、練習は自主的に行いましたか。強制的でしたか。

- | | | |
|------------|------------|--------------|
| 1. 非常に自主的 | 2. まあまあ自主的 | 3. どちらとも言えない |
| 4. まあまあ強制的 | 5. 非常に強制的 | |

18, 中学生の時、1週間に平均何回練習場に行きましたか。

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 1. 0回 | 2. 1回 | 3. 2回 | 4. 3回 |
| 5. 4回 | 6. 5回 | 7. 6回 | 8. 毎日 |

19, 中学生の時、平均練習時間はどれくらいでしたか。

1. 練習する

- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1-1. 30分未満 | 1-2. 30分以上1時間未満 | 1-3. 1時間以上2時間未満 |
| 1-4. 2時間以上3時間未満 | 1-5. 3時間以上 () | |

2. 練習しない

20, 中学生の時、練習場では平均何球練習しましたか。(平均)

- | | | | |
|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1. 0球～50球 | 2. 51球～100球 | 3. 101球～200球 | 4. 201球～300球 |
| 5. 301球～400球 | 6. 401球～500球 | 7. 501球以上 | |

21, 中学生の時、1カ月に平均何回ラウンドに行きましたか。(1年のラウンドを12カ月に割ってください)

- | | | | |
|----------|-------------|----------|----------|
| 1. 0回 | 2. 1回～2回 | 3. 3回～4回 | 4. 5回～6回 |
| 5. 7回～8回 | 6. それ以上 () | | |

22, 中学生の時、ゴルフの指導者は誰でしたか。(複数回答あり)

- | | | | |
|-----|-------|-----------|--------|
| 1.親 | 2.祖父母 | 3.プロゴルファー | 4.それ以外 |
|-----|-------|-----------|--------|

23, 中学生の時、練習は自主的に行いましたか。強制的でしたか。

1. 非常に自主的
2. まあまあ自主的
3. どちらとも言えない
4. まあまあ強制的
5. 非常に強制的

24, 高校生の時、1週間に平均何回練習場に行きましたか。

1. 0回
2. 1回
3. 2回
4. 3回
5. 4回
6. 5回
7. 6回
8. 毎日

25, 高校生の時、平均練習時間はどれくらいでしたか。

1. 練習する

- 1-1. 30分未満
- 1-2. 30分以上1時間未満
- 1-3. 1時間以上2時間未満
- 1-4. 2時間以上3時間未満
- 1-5. 3時間以上 ()

2. 練習しない

26, 高校生の時、練習場では平均何球練習しましたか。(平均)

1. 0球～50球
2. 51球～100球
3. 101球～200球
4. 201球～300球
5. 301球～400球
6. 401球～500球
7. 501球以上

27, 高校生の時、1カ月に平均何回ラウンドに行きましたか。(1年のラウンドを12カ月に割ってください)

1. 0回
2. 1回～2回
3. 3回～4回
4. 5回～6回
5. 7回～8回
6. それ以上 ()

28, 高校生の時、ゴルフの指導者は誰でしたか。(複数回答あり)

1. 親
2. 祖父母
3. プロゴルファー
4. それ以外

29, 高校生の時、練習は自主的に行いましたか。強制的でしたか。

1. 非常に自主的
2. まあまあ自主的
3. どちらとも言えない
4. まあまあ強制的
5. 非常に強制的

30, 大学生の時、1週間に平均何回練習場に行きましたか。

1. 0回
2. 1回
3. 2回
4. 3回
5. 4回
6. 5回
7. 6回
8. 毎日

31, 大学生の時、平均練習時間はどれくらいでしたか。

1. 練習する

- 1-1. 30分未満
- 1-2. 30分以上1時間未満
- 1-3. 1時間以上2時間未満
- 1-4. 2時間以上3時間未満
- 1-5. 3時間以上 ()

2. 練習しない

32, 大学生の時、練習場では平均何球練習しましたか。(平均)

1. 0球～50球
2. 51球～100球
3. 101球～200球
4. 201球～300球
5. 301球～400球
6. 401球～500球
7. 501球以上

33, 大学生の時、1カ月に平均何回ラウンドに行きましたか。(1年のラウンドを12カ月に割ってください)

1. 0回
2. 1回～2回
3. 3回～4回
4. 5回～6回
5. 7回～8回
6. それ以上 ()

34, 大学生の時、ゴルフの指導者は誰でしたか。(複数回答あり)

- 1.親 2.祖父母 3.プロゴルファー 4.それ以外

35, 大学生の時、練習は自主的に行いましたか。強制的でしたか。

1. 非常に自主的 2.まあまあ自主的 3.どちらとも言えない
4. まあまあ強制的 5. 非常に強制的